

其後西外務大臣ト露國公使トノ間ニ協議ノ末之ヲ公表スルコトニ決定シ双方トモ五月十日ノ官報ニテ公表シタリ。

二九六

第八章 滿洲ニ關スル露清密約問題

日清戰爭後露國ハ速ニ支那殊ニ滿洲ニ向テ侵略的行動ニ出テ、日清講和條約締結直後獨佛兩國ト共同シテ帝國政府ニ勸告シテ遼東半島ヲ清國ニ還附セシメ、更ニ其代償タル追加償金ヲ減額セシムルト共ニ右償金ニ充ツル爲露國政府保障ノ下ニ露佛共同シテ期限三十六年四分利附四億法(内一億五千萬法ハ露國銀行引受)ノ借款ヲ與フル等清國ニ恩ヲ賣リ、爾來着々經濟上政治上ノ獨占的地歩ヲ滿洲ニ確立スルニ至レリ。明治二十八年(一八九五年)十二月露國ハ大藏大臣「ウイッテ」ノ首唱ニ依リ東亞諸國トノ通商促進ノ名ノ下ニ其經濟的勢力ヲ扶植センカ爲主トシテ佛資ニ基ク資本金六百萬留ノ露清銀行ヲ設立シタリ。

次テ露國ハ明治二十九年露帝戴冠式參列ノ爲入露セル李鴻章ト交渉シテ密約ヲ結ビ、同條約ノ規定ニ據リ東清鐵道ノ敷設權ヲ得、又獨逸ノ膠州灣占領ニ對應シ一八九七年十二月軍艦ヲ旅順ニ派シ遂ニ之ヲ占領シ、翌年三月二十七日獨逸ノ膠州灣租借ニ倣ヒ旅順大連及遼東半島ヲ租借シ南滿ニ東清鐵道ヲ延長スルノ條約ヲ締結シタリ。斯クシテ露國ハ三年餘ニシテ滿洲ヲ鐵道ヲ以テ制壓シ、西伯利鐵道ノ終點ヲ太平洋ニ面スル不凍港ニ置キ之ヲ軍事の基地トシテ南下ノ形勢ヲ強化シ、次テ北清事變ヲ利用シテ軍隊ヲ以テ滿洲ヲ占領スルニ至レリ。

露國政府ハ自ら屢次滿洲ニ於ケル其軍事行動ハ一時的措置ニシテ事情許サハ直ニ撤兵スヘク又同地方ニ於ケル外國ノ權利ヲ毀損スル意ナキコトヲ聲明シタルカ、事實ハ之ニ反シ容易ニ撤兵セス、撤兵ノ

二九七

手續トシテ國防ノ安全、鐵道ノ保護、東清鐵道會社ニ與ヘラレタル利權ノ確保等ノ名ノ下ニ滿洲ニ於ケル清國々防方ヲ皆無ニシ、露國以外ニ他國鐵道ノ敷設ヲ許サス又清國行政權ヲ其監督下ニ置キ鑛山森林等ノ經營ヲ獨占的ニ掌握セントスルカ如キ各種要求ヲ逐次清國ニ向テナシタリ。

其第一ハ一九〇〇年十一月十二日ノ旅順協商ニシテ、右協商ニ於テ露國側ハ奉天省ノ清國軍隊ヲ解散シ、砲壘及火藥庫ヲ破壊シ、武器ヲ押收シ、警察隊ノ人數ヲ制限シ、且ツ之カ大砲ノ使用ヲ禁シ、地方事變ハ露國軍隊ヲ以テ鎮壓スルコト等ヲ規定セリ。右協商ハ清國政府ニ於テ之ヲ認メサリシ結果露都ニ於テ交渉スルコトナリタルカ、露國ハ右要求ノ事項ヲ幾分變更セルモ、更ニ滿洲ニ於ケル清國各將軍ノ任命ニ付露國ノ承認ヲ要スルコト、滿洲及蒙古ニ於テハ他國勢力ヲ排除シ鐵道ハ露國以外ニ何國モ敷設スルコトヲ得サルコト、露國商品ノ輸入上ノ特典供與等ヲ要求シタリ。右ノ要求ニ關シテハ清國政府ヨリ列國ニ居中調停ヲ依頼シ、帝國政府及英獨其他ノ政府ヨリ露國政府ニ本問題ヲ北京使臣會議ニ附議センコトヲ申入レタル爲遂ニ露國ハ此交渉ヲ自ラ斷絶スルニ至レリ。

次テ北清事變ニ出動セル各國軍隊カ撤退スルニ及ヒ清國政府ハ滿洲ノ露兵撤退ヲ要望シ交渉ヲ開始セルニ、露國ハ期ヲ定メテ撤兵スルノ條件トシテ在滿清國軍隊ノ人數及武器ノ制限、牛莊鐵道ニ關スル失費賠償及特權、東清鐵道ノ鑛山森林利權等ニ關スル協約ノ締結ヲ要求セリ。之ニ對シ帝國政府ハ清國側ノ要望ニ依リ主動者ノ地位ニ立チ英米政府ト協働シテ清國政府ニ助言ヲ與ヘ、清國ノ主權及領土保全ニ反シ又他國ノ清國トノ條約上ノ權利ヲ侵害スル如キ要求ヲ拒絕セシメタル結果、日英同盟成立後ノ一九〇二年四月八日滿洲撤兵(又ハ還附)協約締結セラレ、利權許與ニ關スル問題ハ露國ヨリ其要求ヲ取止ムルニ至レリ。

然ルニ一九〇三年四月撤兵第二期滿了間際ニ至リ露國ハ其約ヲ履行セサルノミナラス却テ軍事行動ヲ盛ニスルト共ニ、四月十八日在清露國公使ハ清國政府ニ對シ遼河水域ノ不割讓、蒙古ノ行政不變更、滿洲ニ於ケル開港市禁止、北清ニ於ケル露國人傭聘等七ヶ條ノ要求ヲナセリ。然レトモ清國政府ハ之ヲ拒絕シタルヲ以テ露國ノ密約締結ニ依ル野望ハ成ラザリキ。

帝國政府ハ滿洲ニ於ケル露國ノ行動ニ對シ當初ヨリ深甚ノ注意ヲナシ居リタルカ、一八九八年三月旅大租借ニ關スル露國政府通牒ニ際シ、西外務大臣ハ韓國ニ於ケル勸告及補助ヲ全然我方ニ負擔セシムルニ於テハ滿洲ヲ我利害關係ノ範圍外ニ在ルモノト認ムヘシト言ヘルモ露國之ニ應セザリシヲ以テ、爾來帝國ハ滿洲問題ニ對シ清國ノ主權及領土保全ノ主義ヲ堅持シテ常ニ清國政府及當路ニ助言ヲ與ヘ且ツ英米其他ノ友好國ト協働シテ露國ノ不當ナル要求ヲ拒絕セシメ、他方明治三十六年八月以來滿韓ノ大局問題ニ付露國政府ト交渉ヲ重ネタルモ、露國ハ滿洲問題ヲ除外シ且ツ韓國ニ於ケル我自由行動權ヲ制限スルノ主張ヲ頑トシテ固執シ我方當然ノ要望ヲ容認セザリシ爲遂ニ日露間ニ開戦ヲ見ルニ至レリ。

茲ニ滿洲ニ關スル露清間密約締結交渉ノ經緯ニ付左ニ説述スヘシ。

第一節 東清鐵道ノ敷設及旅大租借

第一項 露清同盟密約(防禦相互援助條約)ノ締結

在清露國公使「カシニイ」伯ハ日清戰後ニ於ケル清國要路ノ反日感情ヲ利用シ、清國トノ對日共同防衛ニ假託ケ滿洲ヲ通過スル鐵道敷設ノ特權ヲ獲得セントシ、下關條約締結ニ依リ信用ヲ失墜シ居リシ親

露主義ノ李鴻章ヲ露帝戴冠式ニ參列スヘキ特派大使トシテ起用センコトヲ清廷ニ要求シテ之ニ成功シ、明治二十九年三月李ノ出發前密約案ヲ作製セリ。本件ノ發案者タル露國大藏大臣「ウイッテ」ハ露清銀行總裁「ウフトムスキイ」公ヲシテ李鴻章ヲ「ボートサイド」ニ迎ヘシメ、歐洲ノ他ノ地ニ立寄ルコトナク露國軍艦ヲ以テ直路「オデッサ」ヲ經テ莫斯科ニ誘引シ儀禮ヲ厚クシテ其歡心ヲ得タル上、數次ニ互リ會談ヲ行ヒ遂ニ「ザバイカル」ヨリ北滿ヲ通過シテ浦潮ニ達スル鐵道ノ敷設ニ同意セシメタリ。右ニ依リ外務大臣「ロバノフ」公ニ於テ條約案文ヲ起草シ、遂ニ露曆五月二十二日莫斯科ニ於テ同大臣及「ウイッテ」ト李鴻章トノ間ニ所謂露清同盟條約ナル露清防衛相互援助條約ニ調印ヲ了シタリ。

本條約ノ内容ハ支那側ヨリ得タルモノニ依ルニ左ノ如シ。
露清兩國皇帝ハ東方現在ノ和局ヲ保守シ將來他國ヲシテ再ヒ亞洲ノ土地ヲ侵占スル様ノコトナカラシメント欲シ禦敵相互援助條約ヲ締結スルニ決シ茲ニ兩國全權ニ命ジテ左ノ條款ヲ約定セシム
第一條 日本國若シ露領東亞ノ領土又ハ清國或ハ朝鮮ヲ侵占スルコトアラハ直ニ本條約ニ牽礙スルニ付即時約ノ如ク辨理スヘシ是等ノ場合ニ對シ兩國ハ次ノ如ク約明ス即チ海陸各軍ノ其時ニ際シ能ク派遣シ得ヘキモノハ盡ク之ヲ派遣シ相互ニ援助スヘク軍器糧食モ亦力ヲ盡シテ相互ニ接濟スヘキモノトス
第二條 露清兩國ハ既ニ協力シテ敵ヲ禦クコトヲ決シタレハ兩國共同商議ノ上ニアラサレハ一國單獨ニ敵ト和約ヲ議立スルコトヲ得ス
第三條 開戦ノ場合必要ノ事アラハ清國ハ總テノ港灣ヘ露國軍艦ノ入港ヲ許スヘシ若シ需ムル所アラハ地方官ハ力ヲ盡シテ幫助スヘシ

第四條 露國カ將來露兵ヲ轉運シテ敵ヲ禦キ且軍器糧食ヲ接濟スルニ當リ其安速ヲ期スル目的ヲ以テ清國政府ハ黑龍江吉林地方ニ於テ鐵道ヲ聯絡敷設シ以テ浦潮斯德ニ達スルコトヲ許ス但此鐵道聯絡敷設ニ關シ端ヲ藉リテ清國ノ土地ヲ侵略スルコトヲ得ス亦清國皇帝固有ノ權利ヲ侵害スルコトヲ得ス其工事ハ清國政府ヨリ露清銀行ニ命ジテ承辦セシム可シ其契約條約ハ在露清國使臣ト銀行ト近ク商訂スヘシ
第五條 露國ハ第一條ノ敵ヲ禦ク時ニ於テ第四條ニ記セル鐵道ヲ用ヒテ軍隊糧食軍器ヲ輸送スヘシ但平常事無キトキ露國ハ亦本鐵道ニ在テ通過ノ軍隊糧食ノヒヲ輸送スヘク列車運轉上一時停車スルノ外他ノ理由ニ依リ停留スルコトヲ得ス
第六條 本條約ハ第四條ノ契約批准ノ日ヨリ起算シテ十五ケ年ヲ期限トシ滿期六ケ月前ニ兩國再ヒ商議ノ上期限延長ヲ行フ

ロバノフ
李鴻章
ウイッテ

光緒二十二年四月二十二日 莫斯科ニ於テ訂ス
露曆千八百九十六年五月二十二日 莫斯可ニ於テ訂ス
本條約ハ漢佛文ヲ以テ作成シ議論アルトキハ佛文ヲ以テ證トス
本條約ハ同年清曆八月二十二日露曆九月十六日批准交換ヲナシ清國側慶親王、軍機大臣戶部尚書翁同龢及尚書銜戶部左侍郎張蔭桓、露國側「カシニイ」署名捺印セリ。
右露清密約ニ關シテハ初メ明治二十九年三月三日「タイムス」紙ニ露清同盟條約締結セラレ李鴻章カ露

國ニ批准書ヲ携行スヘシトノ報道掲載セラレタルヲ以テ帝國政府ニ於テハ其真偽ノ取調ヲ行ヒ、三月十六日在露西公使ハ訓令ニ依リ露國外務大臣ニ問合ヲナス所アリタルニ、同大臣ハ所謂同盟條約ナルモノニ關スル外國ノ報道ハ事實無根ニシテ遼東半島租借ノ如キハ清國ト協議シタルコトモナキ旨ヲ答ヘタリ。然レトモ當時露都外交社會ニ於テハ李鴻章ハ大連ニ至ル迄ノ鐵道ニ關スル讓與ニ付露國政府ト談判スヘキ廣大ナル權限ヲ帶ヘルハ儘ナリト見做シ居リ其真相不明ナリシカ、同年十二月ニ至リ上海新聞ハ露清條約ニ關スル報道ヲナセルヲ以テ、同月十六日在露本野代理公使ハ露國外務大臣代理シシキンニ尋ネタル處、同代理ハ右ハ徹頭徹尾捏造ノ虛報ナリト打消シタリ。

其後同月二十四日露國官報ハ露清銀行ハ黑龍江省西境ノ一地點ヨリ吉林省東境ニ至ル鐵道ノ敷設權ヲ得タリ、右許可期限ハ八十年ニシテ一八九七年八月起工シ六十年ニテ竣工スヘク、右事業ハ露國大藏省ノ管轄ニ在ルコト及同銀行ハ亦鑛山探掘經營ノ權利ヲモ得タル旨ヲ報シ、之ニ依リ東清鐵道建設ノコトハ知レタルモ露清密約ハ後ニ至ル迄秘密ニ保タレタリ。

然ルニ明治三十五年三月滿洲協約問題ニ關シ内田公使ヨリ慶親王ニ就キ右密約ノコトヲ尋ネタルニ同親王ハ初メハ全ク知ラズト答ヘ居リシカ、其後明治三十六年十二月末上海中外日報紙上ニ李鴻章ト總理衙門トノ往復電報及密約案掲載セラレタルヲ以テ、内田公使ハ右出所ニ付精査ヲ遂ケ明治三十七年五月十三日慶親王ト會談ノ際突込ミテ質問シタル處、同親王ハ遂ニ其存在ヲ認メ次テ六月二十四日外務部ニ於テ那桐ヲシテ之ヲ同公使ニ内示セシメタリ。

右密約ニ關シ慶親王ハ内田公使ノ問ニ對シ、最初李鴻章ニ條約締結ノ權限ヲ附與シタルニアラス、李鴻章ノ露國ニ到リタル後恭親王、翁同龢及張蔭桓三人ノ間ニ電報ヲ往復シタルモノニシテ自分ハ全然之

ニ與リ居ラス、此條約關係書類モ一切記録ニ存在シ居ラサルヲ以テ他一人モ此事ヲ知ルモノナカリシカ、北清事變後禁苑内三海ニテ右密約正本カ露兵ノ手ニ入りタリトテ露國公使ヨリ回送アリシニ依リ初メテ見タル旨語レリ。

尙内田公使ハ同親王ニ對シ、日露開戦後露國ハ右密約ニ基キ清國ニ露國ヲ助クヘシトノ申込ヲナシタルヤヲ問ヒタルニ慶親王ハ、該密約ハ單ニ露國カ清國ヲ助クアリテ相互的ニ助クヘシトノ意ニアラス、若シ然リトセハ今同清國ノ中立ニ對シ露國カ之ヲ賦過スル管ナシト説明シ、尙清國ハ之ヲ廢約ト爲シ東清鐵道ノコトハ新ニ協議ヲ要スルコトナルヘシ等ノ旨ヲ附言シタリ。

帝國政府ニ於テハ今後如何ナル時機ニ於テ如何ニ此密約ノ處分ヲ爲スヤハ慎重ナル考慮ヲ要スルヲ以テ本件ヲ極秘ニナシ置クコトセリ。

第二項 東清鐵道ノ敷設

前項ニ述ヘタル露清秘密條約第四條ニ據リ露國ハ清國ヨリ北滿ヲ通過スル鐵道ノ敷設及經營ニ關スル權利ヲ得タルカ、右秘密條約訂結ノ際ニ於ケル談判ノ模様ヲ見ルニ、「ウイッテ」ハ當初公然露國政府ノ手ニ於テ此鐵道ヲ敷設セントノ趣旨ヲ以テ李鴻章ニ交渉シタルモ、李ハ他國ノ爲ニ惡例ヲ開クコトヲ恐レ之ヲ拒絕シタルヲ以テ、露國ハ形式上之ヲ露清銀行ノ承辦ニ屬スルコトニ改メタリ。

李鴻章ハ其ノ總理衙門宛電報ニ於テ、「ウイッテ」ニ對シ銀行ノ代辦ハ其實露國ノ代辦ナレハ清國ノ權利ニ害アリ各國必ス之ニ做ハント云ヒシニ、「ウイッテ」ハ若シ之ヲ承諾セザレハ清國ニ於テ自辦ノコト亦期スヘカラス、露國ハ先ツ「ネルチンスク」ニ至ルマテノ線路ヲ敷設シ以テ機會ヲ俟ツヘシ但シ今後ハ露國ハ再ヒ清國ヲ援助スルコト能ハスト述ヘ、又露帝ニ於テ清國自身此鐵道ヲ敷設セントセハ恐ラク

ハ力足ラス或ハ在上海露清銀行ヲシテ承辦セシメ適當ノ章程ヲ定メタル上清國之ヲ監督セハ弊害ナカ
ルヘキ旨ヲ言ハレタルカ右ハ各國ニ其事例モアルコトナレハ商議ノ上奏請實行センコトヲ希望ス、將
來日英再ヒ事ヲ起ササルヲ保シ難ク露國ハ之ニ對シ清國ヲ援助スヘシト云ヘル處、右「ウイッテ」ノ所説
ハ穩當ナルニ依リ此際上開ニ達スルコト必要ナル旨ヲ述ヘタルカ、又他ノ電報ニ於テ「ウイッテ」カ提
示セル契約案ニハ、出資ハ露清兩國人ニ限リ清國ハ損害ノ如何ニ不拘毎年二十五萬弗ヲ受クヘク最初
ニ二百萬弗ノ交付ヲ受クヘク、而シテ該鐵道ハ五十年乃至八十年ヲ經テ清國ニ還附スヘキ旨ヲ記載シ
アリシコトヲ報告セリ。

三〇四

尙「ウイッテ」ハ露清銀行ヲシテ特別ノ株式會社ヲ設立セシメ同會社ニ本鐵道ノ敷設及經營ヲ行ハシム
ルコトヲ提議シ李鴻章之ニ同意セルカ、新鐵道ハ李鴻章ノ提議ニ依リ東清鐵道ト稱スルコトナレ
リ。

一、露清銀行ノ改組

斯クシテ第一ニ露清銀行ヲ改組シ之ヲ露清合辦事業トナスコトシ、在露清國公使許景澄ハ光緒二十
五年（一八九六年）七月二十日（新曆八月二十八日）附清帝ノ命ヲ受ケ露清銀行總裁「ウフトムスキ
イ」公及同行重役「ロトシナイ」ト交渉ヲ遂ケ、新曆九月八日「露清銀行組合ニ關スル協定」ニ調印シ、
十月二十日北京ニ於テ批准交換ヲ了セリ。

右協定ノ要領左ノ如シ。

一、清國政府ハ庫平銀五百萬兩ヲ出資シ露清銀行ト合辦事業ヲナス
二、銀行ノ利益金ハ重役賞與ヲ取り其殘額一割ノ積立金ヲ控除シタルモノヲ株數ニ比例シテ配當

ス、又利益金カ資本金ノ六分ヲ超ユルトキハ其超過額ノ二割ヲ重役賞與トシテ與フ、若シ損失ア
リタル場合ニハ清國政府ノ負擔分ハ積立金ヨリ支辨ス

三、銀行ノ業務報告ハ清國政府ヨリ任命セル東清鐵道會社總辦ニ提出スヘシ

二、東清鐵道敷設及經營ニ關スル契約

右露清銀行合併ニ關スル協定同日同一當事者ニ依リ東清鐵道敷設及經營ニ關スル契約調印セラレタ
ルカ、右契約ノ要領左ノ如シ。

清國政府ハ「チタ」及南「ウスリー」鐵道間ノ聯絡交通ノ爲鐵道ノ建設ヲ決シタル處右鐵道ノ建設及經
營ハ左記條件ニ從テ之ヲ露清銀行ニ委任ス

第一條 露清銀行ハ該鐵道ノ建設及經營ノ爲東清鐵道會社ナル一會社ヲ設立ス

會社ノ定款ハ鐵道會社ニ關スル露國慣習ニ從フモノトス

會社ノ株式ハ露清兩國人ニ限リ之ヲ所有ス

會社ノ印章ハ清國政府ヨリ下附ス

會社社長（督辦）ハ清國政府ヨリ任命シ北京ニ所在ス

其俸給ハ會社支辨トス

一切ノ交渉ノ爲露清銀行代理人ヲ北京ニ置ク

第二條 鐵道建設區域ハ社長代表、會社技師及地方官憲之ヲ協定ス

線路ハ可成募地及市村落ヲ回避スルコト

第三條 着工期限ハ本契約裁可ノ日ヨリ十二ヶ月以内、竣工期限ハ線路確立シ會社カ所用地ヲ處分

三〇五

シ得ル日ヨリ六ケ年トス、軌條ノ幅ハ露國鐵道ト同一タルコト

第四條 (省略)

第五條 清國政府ハ鐵道及其職員ノ安全ヲ確保スル措置ヲトルヲ要ス、會社ハ鐵道ノ管理上任意ニ外國人及内地人ヲ雇傭スル權利ヲ有ス

鐵道地域内ノ刑事事件訴訟ハ條約ノ規定ニ從ヒ地方官憲之ヲ解決ス

第六條 鐵道ニ必要ナル土地並ニ土砂石材石塊等採取ニ必要ナル沿線ノ土地ハ官有地ナルトキハ無償ニテ會社ニ交付ス

會社ノ土地ハ一切ノ不動産稅ヲ免除ス

會社ハ其附屬地ニ關シ絕對的且排他的行政權ヲ有ス

會社ハ其附屬地ニ一切ノ建造物ヲ建築シ電信ヲ建設經營スル權利ヲ有ス

第七條 鐵道用物件及材料ハ一切ノ關稅及内國稅ヲ免除ス但嶺山ハ特別ノ協定ニ依ル

第八條 露國軍隊及軍需品ハ嚴密ナル必要以上ニ本鐵道ニ途中停車セザルコト

第九條 清國臣民以外ノ旅客カ鐵道附屬地ヨリ内地ニ入ル場合ニハ清國護照ヲ所持スルヲ要ス

第十條 露國通過貨物ハ關稅及内國稅ヲ免除ス本鐵道ニ依リ露國輸出入ノ貨物ノ輸出入稅ハ三分ノ一ヲ減ス、右貨物カ内地ニ仕向ケラルトキハ其課セラレタル輸入稅ノ半額ニ等シキ通過稅ヲ別ニ仕拂フモノトス

第十一條 鐵道ハ營業開始後八十年ヲ經テ清國政府ニ無償ニテ引渡ス、三十六年後清國政府ハ買收

スルコトヲ得

三、東清鐵道會社ノ設立及工事

右東清鐵道敷設及經營ニ關スル契約成立後資本金五百萬留ヲ以テ東清鐵道會社設立セラレ、一八九六年十二月四日會社定款ハ露帝ノ裁可ヲ得、同月二十七日「ケルベツ」、「ロトシテイン」、「ウフトムスキ」、「ボコチロフ」外二名ノ重役任命セラレ、「ケルベツ」會社(副社長)ニ選舉セラレ、「ボコチロフ」ハ契約第一條ノ在北京代理人トナリ、清國政府ニ於テ翌年一月十二日許景澄ヲ督辦(社長)ニ任命セリ。斯クテ會社ハ一八九七年三月一日創立式ヲ行ヒ八月十六日起工式ヲ舉行、翌一八九八年五月二十八日哈爾濱ニ於テ實際ノ工事ニ着手シ、又「ウスライ」鐵道「ニコリスク」「ボグラニチナヤ」間鐵道建設ヲモ引受ケ同年十二月十八日同區間ハ旅客列車ノ運轉ヲ開始セリ。

四、南滿支線

先之一八九八年三月二十七日遼東半島(旅大)租借ニ關スル條約締結セラレ、露國ハ東清鐵道幹線ノ一驛ヨリ大連灣及必要ノ場合ニハ該本線ヨリ營口及鴨綠江間沿海ノ便利ナル一地ニ至ル鐵道ヲ敷設シ之ニ東清鐵道ニ關スル契約ヲ適用スル權利ヲ得タリ。右ニ基キ同年七月六日在露公使許景澄ト東清鐵道會社幹部トノ間ニ南滿支線ニ關スル契約締結セラレタリ。會社ハ一八九九年二月五日露帝ノ裁可ヲ經タル定款第一追加ニ依リ南滿支線ノ建設及經營ト共ニ大連ニ商港ヲ築造シ、太平洋汽船業ヲ營ミ浦潮及大連ト日本支那其他ノ諸港トノ諸航路ヲ經營シ、沿海州ニ於ケル「シエヴェロフ」經營ノ航運業ヲ繼承スルコトナレリ。右哈爾濱ヨリ大連及旅順ニ至ル南滿支線ハ東清鐵道本線ト共ニ建設中北清事變ニ依リ破壊セラレタル

モ、一九〇一年七月五日東清鐵道本線ト連絡シ、一九〇三年七月一日全線營業ヲ開始スルニ至レリ。

第三項 露國ノ旅大租借

明治三十年十一月獨逸艦隊カ膠州灣ヲ占領スルヤ、露國ハ之ニ對應スル爲旅順口ニ軍隊ヲ派遣シ同港ヲ碇泊所トナシ艦ヲ冬營シテ容易ニ退去スヘキ模様ナカリシヲ以テ、清國政府ハ旅順口ニ露國軍艦ノ碇泊ヲ許シタルハ一時的ノ約ナルニ依リ速ニ退去スヘキ旨ヲ露國政府ニ要求シタリ。而シテ翌三十一年一月獨逸カ膠州灣ヲ九十九ケ年間租借スヘキ條約ヲ締結スルヤ、三月三日在清露國代理公使「バヅロフ」ハ他國カ清國ヲ侵略スル虞アルニ付清國ヲ庇保スル爲ト稱シ旅順及大連ノ租借ト南滿ニ鐵道建設ノ特許ヲ要求シ五日ノ期限ヲ以テ回答ヲ求ムルト共ニ、他方露國ハ三月二十一日旅順ニ陸兵千二百名ヲ上陸セシメ威嚇ヲナシ、遂ニ三月二十七日北京ニ於テ旅順大連及附近地方租借並ニ東清鐵道南滿支線敷設ニ關スル協商ヲ締結セリ。右協約ノ要領左ノ如シ。

露清兩國帝ハ兩國ノ友好關係ヲ更ニ鞏固ナラシメ且ツ相互的幫助ノ方法ヲ共ニ保證センコトヲ希望シ兩國全權ヲ任命シ兩國全權ハ次ノ條款ヲ協定セリ

第一條 清國ハ露國海軍ノ北清ニ於ケル根據地トシテ旅順及大連ノ兩港並ニ之ニ連接スル水域ヲ露國ニ租借セシムルコトヲ承諾ス、但シ該地ニ對スル清國ノ主權ハ何等侵害セサルモノトス

第二條 租借地域ハ大連灣ヨリ北方陸上ノ防禦ニ必要ナル距離ニ到ルモノトス、該境界ハ本協約調印後直ニ露都ニ於テ清國全權許景澄ト別ニ議定書ヲ以テ規定スヘク、右地域ハ露國ノ完全且ツ排他的使用ニ供セララルモノトス

第三條 租借期限ハ二十五ケ年トス、同期限ハ兩國政府協議ニ依リ之ヲ延長スルコトヲ得

第四條 本租借地域ニ於ケル陸海軍總指揮權及最高民政權ハ全部露國官憲ニ屬スヘシ、但シ同長官ニ知事又ハ總督ノ名稱ヲ附スルコトヲ得ス

清國軍隊ハ本地域ニ入ルヲ得ス

清國臣民ハ其希望ニ依リ本地域ヨリ退去シ又ハ殘留スルコトヲ得、本地域内ニ於テ罪ヲ犯シタル清國臣民ハ之ヲ清國官憲ニ引渡ス

第五條 本租借地ノ北方ニ中立地帯ヲ設ク、該地帯ノ民政權ハ清國官憲ニ在ルモノトス、清國軍隊ハ露國官憲ト商議ノ上該地帯ニ入ルヲ許ス

第六條 旅順口ハ全然軍港トシ露清兩國艦船ニ限リ使用シ他外國艦船ハ入港スルヲ許サス

大連灣ハ其内灣中露清兩國艦隊用ノ一港ヲ除キ他ノ水域ハ外國船ノ爲ニ開放ス

第七條 露國ハ租借地ニ於テ海陸軍用ノ施設ヲナシ築城シ守備兵ヲ置ク等凡ソ敵ノ攻撃ニ對スル有效ナル防禦上必要ノ手段ヲ講スヘシ、尙露國ハ燈臺其他航海安全ノ爲施設ヲナシ之ヲ維持スヘシ

第八條 清國政府ハ一八九六年東清鐵道會社ニ許與シタル特許權ヲ擴張シテ東清鐵道幹線ヨリ營口及鴨綠江口間ニ於ケル遼東半島沿岸ノ一層便利ナル地點マテ敷設セラルヘキ支線ニ及ホスコトヲ承諾ス、右支線ニ對シテハ一八九六年八月二十七日清國政府ト露清銀行ト契約ノ各條款ヲ適用ス、同支線ノ方向及地點ハ許全權ト東清鐵道會社トノ間ニ協定スルコト

右鐵道敷設ノ承認ハ清國領土ノ獲得又ハ清國主權侵害ノ口實トナスヘカラス

第九條 本協約ハ本書交換ノ日ヨリ發效ス、批准交換ハ可成速ニ露都ニ於テ行フモノトス

本協約ハ露語及清語ヲ以テ作成シ露文ヲ正本トス

三〇

李 鴻 章

右協約ニ規定スル追加議定書ハ露曆同年四月二十五日(五月七日)露都ニ於テ露國全權「ムラビヨフ」伯ト許景澄トノ間ニ締結セラレタリ。議定書ノ重ナル點ハ左ノ如シ。

第一條 租借地大體ノ境界

第二條 中立地帯大體ノ境界

第三條 南滿支線ノ終點ハ旅順口及大連灣トス

右鐵道沿線(利益ヲ受クヘキ地方)ニ於テハ外國人ニ鐵道敷設權ヲ許與セサルコト、但シ清國カ

山海關鐵道ヲ此支線ニ延長シ自己ノ資金ヲ以テ建設スルニ於テハ露國ハ之ニ反對セサルコト

第四條 露國ハ清國ニ於テ金州城ニ必要員數ノ警察ヲ有スル自治的市制ヲ施行スルコトヲ許スコト

ヲ承諾ス

清國軍隊ハ金州城ヨリ撤退シ露國軍隊之ニ代ル

第五條 清國政府ハ左ノ義務ヲ負フ

(一) 中立地帯ニ於テ露國ノ承諾ナクシテ一地區タリトモ之ヲ外國人ニ讓渡セサルコト

(二) 中立地帯ノ東西海岸ニ位スル一港タリトモ之ヲ外國貿易ノ爲ニ開放セサルコト

(三) 中立地帯ニ於テハ露國ノ承諾ナクシテ鐵道敷設、鑛山採掘及一切ノ工業的企業ノ權ヲ許與セ

サルコト

露國軍艦ノ旅順碇泊ニ關シ明治三十年十二月十七日在京露國公使ハ西外務大臣ヲ來訪シ、獨逸艦隊ハ膠州灣ヲ占領シ無期限ニ碇泊スル意嚮ナルカ如キヲ以テ露帝ハ其太平洋艦隊ノ一部ヲ旅順ニ一時的ニ碇泊セシムル爲派遣スルヲ必要トシ清國政府之ニ同意ヲ與ヘタリ、依テ現下露國カ山東半島ニ近ク安全ナル碇泊地ヲ求ムルノ目的ニ對シ日本政府カ信ヲ措カレンコトヲ希望スル趣旨ヲ通告シタルヲ以テ西大臣ハ十二月二十日同公使ニ對シ帝國政府ハ露國艦隊ノ旅順碇泊ハ一時的ノ事ナル旨ヲ通知ニ十分信用ヲ置キ之ヲ開置クモノナリト返答ヲナセリ。又同月二十一日在韓露國公使ハ加藤辦理公使ニ對シ、露國カ旅順ヲ占領セルハ膠州灣一件ニ付英國ノ舉動明ナラス動モスレハ旅順ニ據ラントスルカ如キ模様アルヲ以テ露國カ先制セル旨ヲ語リタリ。三月月上旬在清露國代理公使カ清國政府ニ對シ旅大租借ニ關スル要求ヲナシタル際、李鴻章ハ在清矢野公使ニ對シ英國公使ニナシタルト同様ニ本問題ニ付日本ノ意思ヲ露國ニ斷言セラレ度旨申出テタルカ、同月十七日矢野公使ハ訓令ニ基キ館員ヲシテ總理衙門ニ口頭ヲ以テ、帝國政府ハ清國政府ノ困難ナル現狀ニ同情ヲ表シ清國政府ノ希望ニ付熟慮ヲ遂ケタルモ露國ノ意志要求未タ明白ナラサル今日聲言ヲ爲スハ未タ其機ニ非スト考フル旨ヲ回答セシメタリ。而シテ旅大租借等ニ關スル協約成立後明治三十一年五月二十九日在京露國公使「ローゼン」男ハ西外務大臣ニ對シ覺書ヲ以テ、本國政府ノ命ニ基キ露國ハ旅順及大連ヲ租借シ同地露兵ヲ以テ直ニ之ヲ占領シ露國國旗ヲ清國國旗ノ側ニ掲揚スルコト並ニ大連ヲ外國船ノ爲開港スル旨ヲ通告シ來レリ。

(參考) 山海關支線鐵道ニ關スル英露協約

明治三十一年八月清國政府ト香港上海銀行ト主タル出資者トスル英清會社トノ間ニ契約締結セラレ、之ニ依リ清國政府ハ山海關ヨリ牛莊新築ニ至ル鐵道敷設トシテ五分利附二百二十五萬磅ノ借款ヲ得タルカ、同鐵道收入ヲ擔保トスルコト及技師長ヲ英人トシ管理及會計ハ歐洲人ニ委任スルコトノ二條件アリタルヲ以テ、在清露國代理公使「マゴロフ」ハ右ハ一八九八年ノ露清追加議定書

三一

第三條ニ付ルモノナリト抗議シ、總理衙門ハ右延長線ヲ擔保スルコトナク又外國人ノ管理ニ歸セシムルコトヲキナシタルモ
開國ハ猶之ニ満足セス抗議ヲ重テタルカ、遂ニ露英間ノ交渉問題トナリ結局一八九九年四月二十九日露部ニ於テ清國ニ於ケル鐵道
ニ關スル露英協約締結セラレ、之ニ依リ露國ハ揚子江流域ニ於テ、英國ハ山海關以外ニ於テ互ニ鐵道ノ敷設ヲ要求スルコトナク又
妨害セサルコトヲ約シ、山海關牛莊間ノ鐵道ニ對シ露國ハ異議ヲ唱ヘサルコトナレリ。

三二二

第二節 滿洲ニ關スル第一回露清協約問題

第一項 露國ノ滿洲占領

明治三十三年四月山東省ニ蜂起セル義和團ノ影響ハ五月下旬奉天ニ及ヒ、義和團援助ヲ意味スル六月
八日附清廷ノ達示ハ六月十八日奉天ニ達シ次テ動員令下ルヤ、奉天兵ハ南滿洲鐵道支線ノ奉天、遼陽、
鐵嶺等ノ中心地ヲ攻撃シ且ツ敷設中ノ鐵道ヲ破壞スルニ至レリ。吉林軍ハ同月下旬哈爾濱保護ノ爲出
動シタルカ將軍長順ノ意ニ反シテ鐵道ノ破壞ニ移レリ。而シテ六月二十五日東三省三將軍ハ連名ヲ以
テ東清鐵道ノ讓渡ヲ同鐵道技師長「ユゴヴィチ」ニ要求シタリ。之ニ對シ露國側ハ一九〇〇年初頭歩兵
二千及騎兵二千五百二十七名(最初一八九七年十一月創設當時ハ五百名ノ「カザック」騎兵有リタルノ
ミ)ナリシ東清鐵道警備ノ監視隊ヲ右情勢ニ應シテ五月中旬ヨリ三回ニ亘リ増強シ七千名トナシ更ニ
六月一萬一千名ニ増強シタリ。露國側ハ右三省將軍ノ要求ヲ拒絕スルト共ニ鐵道従業員ヲ沿海州、旅
大及哈爾濱ニ引揚ケシメタリ。然ルニ匪徒ノ勢猖獗ヲ極メ哈爾濱ヲ攻撃シ引揚人及其引揚船ヲ襲撃
シ砲撃スルニ至リタルヲ以テ、露國ハ沿黑龍軍管區司令官兼總督「グロデコフ」大將ノ命ヲ以テ「ハバ
ロフスク」ヨリ汽船四隻ヲ以テ哈爾濱救援軍ヲ派遣シ同隊ハ七月二十一日目的地ニ到着シタリ。之ト
同時ニ「ザバイカル」、沿海州兩方面ヨリ正規軍隊ヲ出動セシメ八月二十日迄ニ滿洲里「ボグラニチナ

ヤ」間、九月末日迄ニ南滿支線全部ヨリ清兵ヲ掃蕩セリ。而シテ松花江流域ハ七月十九日迄ニ露軍ノ
手ニ歸シ、黑龍江ニ於テハ七月二日武市對岸ノ清兵カ武市ヲ砲撃セルヲ以テ同市ニ在リタル露兵ハ之
ニ應戰シ、同時ニ黑龍江ト「ゼーヤ」河トノ間ニ挾マレタル江東六十四屯ノ支那村居住支那人ニ退去ヲ
命シ武力ヲ以テ之ヲ江中ニ逐ヒ込ミ爲ニ溺死スルモノ五千ニ及フ慘事ヲ敢テシ、「レンネンカムプ」將
軍ノ率ユル黑龍江部隊ハ黑河及瑷琿ヲ取り黑龍根ヲ占據シ、八月四日齊齊哈爾ニ入城シ以テ哈爾濱ト
ノ連絡ヲ完成、斯クシテ露軍ハ滿洲ノ要地ヲ占領駐屯セリ。

此間露國政府ハ屢々列強ニ對シ滿洲ニ於ケル這般ノ行動ハ一時的措置ニシテ事情ノ許スニ至ラハ直ニ
撤兵シテ滿洲ヲ清國ニ還附スヘク又同地方ニ於ケル各國ノ權利ヲ毀損スルノ意ナキ旨ヲ聲明シ、同年
七月二十日在京露國公使「イゾヴォルスキ」ハ右ニ關スル露國外務大臣ノ電報寫ヲ帝國政府ニ送り來
リ、更ニ八月二十五日左記要旨ノ口上書ヲ帝國政府其他關係列強ニ通牒セリ。

清國ニ於テ騷擾ノ勃發スルヤ露國政府ノ目的トシタル所ハ已ニ累次聲明シタル如ク左ノ二點ニア
リキ

- 一、露國代表者ヲ救護シ并ニ清國叛徒ノ匪團ニ對シ露國臣民ヲ防衛スルコト
 - 二、可成速ニ清國ニ於ケル秩序ヲ樹立センカ爲叛亂ニ對スル清國政府ノ抗爭ヲ補助スルコト
- 其後關係列強モ亦右ノ目的ノ爲清國ニ派兵スルニ至ルヤ、露國政府ハ清國事變ニ關シ採ルヘキ根本ノ
主義トシテ左ノ四ヶ條ヲ掲ケタル左記要旨ノ通牒ヲ發シタリ。

- 一、列國協同ノ維持
- 二、清國ニ於ケル舊事態ノ保存

三二三

三、清國ノ分割ヲ誘致シ得ヘキコトハ總テ之ヲ避クヘキコト
四、國內ノ秩序靜謐ヲ保持スルニ足ルヘキ正當ノ中央政府ヲ共同ノ盡力ニヨリ北京ニ再立スルコト
右ノ諸點ニ關シテハ列強間ニ完全ナル合意成立セリ

露國政府ハ更ニ他ノ意圖ヲ有セス右ノ政綱ヲ忠實ニ遵守セントスルモノナリ牛莊駐屯ノ露國軍隊ニ
對スル匪徒ノ攻撃並ニ露國々境ニ對スル清人ノ敵對行爲(就中何等ノ挑發ナキニ「ブラゴヴェシチ
ンスク」ヲ砲撃シタルカ如キ)等ノ事變ニ依リ露國ハ牛莊ヲ占領シ又其軍隊ヲ滿洲ニ入ルルニ至リ
タルモ是等ノ措置タルニ匪徒ノ攻撃ヲ却クルノ必要ニ出テタルモノニシテ何等利己的意思ノ微證
タルモノニアラス露國政府ノ政策ハ秋毫モ這般ノ意思ヲ容レサルモノトス滿洲ニ於ケル秩序確立セ
ラレ又東清鐵道會社ニ與ヘラレタル讓與ニ關スル特約ニ依リ先ニ清國ニ於テ其敷設ヲ保障シタル鐵
道線路ノ保護ニ必要ナル一切ノ措置成テセラレタル上ハ露國ハ他國ノ行動ニヨリ阻碍セラレサル限
リ必ス其軍隊ヲ清國ノ領土ヨリ撤退スヘシ而シテ牛莊港又ハ露國軍隊ノ再設セル鐵道線路ニ於ケル
外國政府並ニ會社ノ利益カ依然トシテ侵サレ所ナク且確保セラレヘキハ言ヲ俟タサル所ナリ

第二項 旅順 協商

露國ハ前項ノ如キ通牒ヲ各國ニ送ルト共ニ他面其軍事行動ヲ繼續シ遂ニ滿洲全部ヲ奄有シタリ。其後
十一月ニ至リ遼東租借地總長兼陸海軍總司令「アレクセエフ」中將ハ奉天將軍増祺ヲ誘ヒ露國保護ノ下
ニ其行政ヲ恢復スヘシトナシ、其代表外交部長「コロストヴェツ」ハ奉天將軍代表道台周免外二名ト同
月十一日旅順口ニ於テ第一露清密約又ハ旅順協商ト稱スル左記要領ノ暫行商程ヲ締結シタリ。
第一條 將軍奉天歸任後ハ地方ノ安寧ヲ圖リ鐵道ノ建築修理ニ妨害ナカラシムルノ責ニ任ス

第二條 奉天省内各地ニ鐵道保護及地方安寧ノ爲露兵ヲ駐防セシメ清國官憲ハ露國ノ官職員ヲ禮遇
シ其住居糧食等ノ供給ニ盡力補助スヘシ

第三條 奉天省内ノ軍隊ハ匪徒ニ加擔シテ鐵道ヲ破壞シタルモノナレハ解除シ武裝ヲ沒收スヘク武
庫ニ在ル兵器モ露國武官ニ引渡スヘシ

第四條 砲臺並ニ火藥庫ハ露清兩國官憲立會ノ上破壞スヘシ

第五條 露軍ノ一時管理スル營口等ハ露國政府ニ於テ安全ナルヲ確メタル上ハ之ヲ還附スヘシ

第六條 省内各城鎮屯堡ニ奉天將軍指揮ノ下ニ步騎ノ警察隊ノ組織ヲ許ス其人數小銃等ニ付テハ別
ニ治定スヘシ

第七條 奉天城ニ露清間交渉事務ニ當ラシムル爲露國政務官ヲ置クシハ
第八條 省内ニ清國警察隊ノミニテ鎮壓スルコト能ハサル地方事變アルトキハ將軍ヨリ露國政務官
ヲ經テ武官ニ轉達シ其助ヲ求ムヘシ

第九條 本章程ヲ本文トシ増祺將軍歸任後直ニ實施スヘシ

奉天將軍ハ右約定ヲ北京ニ送リ義和團事變善後談判全權委員タル李鴻章ノ承認ヲ求メタル處、李ハ一
面之ニ調印スヘカラサルコトヲ訓令シ、他面露國公使ニ協議スル所アリ、其結果本件交渉ハ之ヲ露都
ニ移スコトナレリ。

右約定ニ關シ露國ハ奉天省ヲ其保護下ニ置ク條約ヲ結ヒタリトノ情報ニ接スルヤ、在露帝國公使ハ訓
令ニ依リ再度露國當局ニ就キ問合ヲナシタルカ、先方ハ本件ニ付何等知ル所ナク虛報ナルヘシト返答
シタルモ、明治三十四年一月新任ノ在清小村公使ハ其事實ナルヲ確メタリ。同月十日慶親王ニ會見ノ

際親王ハ滿洲事件ノ處分ニ關シ露國政府ト談判ノ全權ヲ其在露公使楊儒ニ與ヘタルコト及右談判ハ旅順約定ニ關係ナク新ナル基礎ニ依リ行ハルヘキ旨ヲ告ケタルニ依リ、小村公使ハ清國ニ於テハ宜シク露國カ其屢次ノ宣言ノ如ク滿洲ヨリ撤兵スヘキヲ主張シ且ツ滿洲ヲシテ事實上露國ノ領有ニ歸セシムルカ如キ讓與ハ總テ之ヲ拒絕シ以テ同地方ノ狀態ヲ恢復スルノ必要ナルヲ勸告セリ。之ニ對シ慶親王ハ其意ヲ諒トシ鐵道保護上必要不可缺程度以外ノ讓與ヲ爲ササル旨確言セリ。

斯クノ如ク滿洲ニ關スル露清間交渉ハ露都ニ於テ行ハルコトナリタルヲ以テ、一月十一日帝國政府ハ在露珍田公使ヲシテ露國政府ニ對シ右協商カ事實ナルヤ若シ事實ナルニ於テハ其性質ノ何タルヤニ付質問セシメタルニ、同月十六日露國外務大臣「ラムスドルフ」伯ハ珍田公使ニ對シ、滿洲問題ハ露清兩國專屬ノ案件ナルカ故ニ日本政府ノ質問ニ對シ正式ノ回答ヲ與フル義務アルヲ感セスト説キ、滿洲ニ於ケル露國今日ノ地位ハ其國境ニ於ケル清人ノ侵襲ニ對スル自衛ノ結果ナルカ故ニ假令露國ニシテ永久ニ同地ヲ占領ストモ別ニ批難ヲ受クヘキ所ナキモ露國ハ敢テ征服者ノ權利ヲ實行スルノ意思ヲ有セス其屢次ノ宣言通り行政ヲ清國ニ還附スヘシ、然レトモ之カ實行ニ當リ鐵道ノ保護、國境ノ安固等ニ關シ清國ト適當ノ協定ヲ爲スヲ必要トスヘキ處右交渉地ハ未定ナリ、協定ノ性質如何ニ付テハ今豫メ云フコトヲ得ス但シ新聞ニ傳ヘラルル露清協約ナルモノハ虛報ナルコトヲ斷言スト述ヘタリ。而シテ在京「イズウォルスキイ」公使モ所謂滿洲保護ニ關スル露清條約ノ虛報ヲ絕對的ニ否認スヘキ旨ノ電訓ニ接シタリトテ「ラムスドルフ」伯ヨリノ電報ヲ加藤外務大臣ニ寄セタルカ右電報寫ニハ、露清間ニ開始セラルヘキ商議ハ滿洲ニ於ケル清國行政ノ恢復及國境ノ安全ト鐵道ノ建設ヲ保障スルニ足ルヘキ恒久的秩序ノ樹立ニ關スヘク、又露軍長官ト奉天將軍トノ間ニ締結セラレタル約定ニ關シテハ露軍ト地

方官憲トノ關係ヲ規定シタル一時的ノ約定ニ過キス、露國政府ニ於テハ征服ノ權利ニ依テ滿洲ヲ領有セス從來ノ宣言ニ依リ之ヲ清國ニ引渡サントスル現事態ニ於テ右ノ虛報ハ特ニ惡意アルモノナリト述ヘ居レリ。

第三項 露都ニ於ケル露清交渉

明治三十四年一月中旬在露清國公使楊儒ハ露國外務大臣ト交渉セントセルモ露國側ノ都合ニ依リ會見スルヲ得サリシ爲、大藏大臣「ウイッチ」ト非公式ニ數次會談ノ結果露國側ノ要求ハ大體左ノ諸點ニ在ルコト明トナレリ。

- 一、軍事行動ニ依ル償金問題ハ北京ニ於テ調査決定セラルヘキコト但シ鐵道損害ハ右償金ニ含まサルモノトス
- 二、清國ハ滿洲ニ於テ警察隊ヲ常置ス但其人數ハ露國ト協議ノ上決定スルコト
- 三、滿洲各將軍ノ任命ニ付テハ露國ハ豫メ協議ニ與ルコト
- 四、露國ハ各將軍ノ下ニ文武官各一名ヲ置キ武官ヲ警察隊ノ監督ニ、文官ハ鐵道事務ノ指揮ニ任セシムルコト
- 五、滿洲蒙古及北清ニ於テハ他國ニ何等ノ便益ヲ許與セサルコト
- 六、清國政府ハ滿洲及蒙古ニ於テ鐵道ヲ敷設スル權ナキコト
- 七、金州ヲ遼東租借地域内ニ包含スルコト
- 八、滿洲ノ稅關ハ露國措辦ノ下ニ置キ清國政府ハ稅關收入監督ノ爲官吏ヲ任命スルコトヲ得
- 九、陸路輸入稅ヲ課セラレタル商品ハ内地稅ヲ免除セララルコト

一〇、露清間ノ國債ノ條件ヲ變更シ利子ヲ毎月支拂フコト
 一一、軍事行動ニ基ク償金ノ支拂皆済ニ至ル迄ハ清國ハ滿洲ニ於ケル鐵道ヲ買戻スコトヲ得ス
 一二、露國ハ山海關半莊鐵道ヲ買收ス右代金ハ償金ヨリ支拂ヒ右剩餘及其利息ハ滿洲ニ於ケル稅關
 收入ヨリ支拂フコト
 一三、露國軍隊ハ漸次期ヲ定メテ撤退スルコト
 而シテ「ウイ、テ」ハ右條件ノ細目ハ討議スヘキモ原則ハ變更シ得サル旨ヲ附言シ之ヲ本國政府ニ取次
 カレ度旨ヲ申述ヘタリ。
 其後楊公使ハ外務大臣「ラムスドルフ」伯ニ會見シタルニ、同大臣ハ旅順協商ノ批准ヲ迫リ右批准セラ
 ルル迄ハ永久的ノ協定ニ關スル交渉ニ入ル能ハサル旨ヲ述ヘタル趣ナリ。
 先之清國政府ハ奉天將軍增祺ヲ旅順約定ノ故ニ依リ免職シタルカ、在清露國公使ノ威嚇ノ申入ノ結果
 李鴻章ハ增祺處分ノ寛減方ヲ西安ニ在ル清廷ニ請願セル由ナリ。
 右露清間交渉ニ關シ一月十七日在清小村公使ハ李鴻章ニ對シ曩ニ慶親王ニナシタルト同趣旨ノ忠告ヲ
 與フル所アリタルカ、李ノ態度ニ鑑ミ張之洞、劉坤一兩總督ヲシテ李ニ壓迫ヲ加フルノ必要ナル旨ヲ
 電京セルヲ以テ、加藤外務大臣ハ在上海小田切領事ヲ南京ニ急行セシメ劉總督ニ勸告セシメタリ。之
 ニ依リ劉總督ハ慶親王、榮祿、李鴻章及楊儒ニ電報シテ露國要求拒絕ノ必要ヲ勸告シ又張總督ニモ共
 同ノ運動ヲ勸誘、爾來共ニ熱心ニ露國ノ謀計ニ反對シ、鐵路大臣盛宣懷モ之ヲ助クルニ至レリ。
 而シテ劉總督ハ帝國ニ對シ首唱ノ地位ニ立チ本件ニ關シ露國ニ對シ干涉權ヲ實行スル目的ヲ以テ清國
 ニ友情ヲ抱クヨリ寧ロ他ノ列國ト協議ヲ遂ケラレンコトヲ請ヒ來レリ。

帝國政府ハ露清特約締結ノ危險ナルコトヲ清國政府ニ警告センカ爲英國政府ト協議ヲ遂ケ、東京及倫
 敦駐清國公使ヲシテ滿洲協商ノ如キ約定ヲナスコトハ危害ノ原因タルコト及領土權ニ關スル協定ヲ
 何レノ國トモ締結セサルヘキコトヲ警告スル旨其政府ニ傳達セシメ、獨逸政府ニハ英國ヨリ、米國政
 府ニハ帝國政府ヨリ、伊埃兩國ニハ獨逸側ヨリ夫々協議シ共ニ同様ノ警告ヲ與フルニ至レリ。
 而シテ清帝ハ露帝ニ親電ヲ送り滿洲還附ニ關スル露國政府聲明ヲ謝シ此上清國ニ向テ強壓的要求ヲ爲
 スナカラントコトヲ請ヒ、又楊儒ニ訓令シテ旅順協商ノ無效ヲ主張セシメタリ。此結果露國ハ此旅順協
 商ノ確認ヲ強ヒサルコトニ同意セルカ二月二十二日新ニ左記十二ヶ條ノ提案ヲナシタリ。
 第一條 露國皇帝ハ友好ヲ表センカ爲滿洲ニ鮮ヲ開キタルコトヲ念セス滿洲ヲ全ク清國ニ還附シ其
 行政ヲ悉ク舊ニ復セシム
 第二條 清國ハ東清鐵道ニ關スル第六條ニ依リ軍隊ヲ以テ鐵道ヲ保護スルコトヲ該會社ニ許與
 シタルモ地方未ダ平靜ナラス且右軍隊ノ人數不充ナルヲ以テ地方ノ平和秩序回復シ尙清國ニ於
 テ本約定末尾ノ四ヶ條ヲ履行スル迄軍隊ヲ滿洲ニ駐ムヘシ
 第三條 非常ノ事變アルトキハ駐屯露國軍隊ハ之カ鎮定ノ爲出來得ル限りノ援助ヲ與フヘシ
 第四條 此次露國ヲ攻撃セシハ主トシテ清國官兵ノ所爲ニ係ルヲ以テ清國ハ鐵道ノ工事竣成シ運轉
 開始ニ至ル迄何等軍隊ヲ組織セサルコトヲ約ス他日清國ニ於テ其軍隊ヲ組織スルトキハ其兵數ハ
 露國ト協議ノ上之ヲ定ムヘシ
 兵器彈藥ハ滿洲ニ輸入スルコトヲ禁ス
 第五條 滿洲防護ノ爲清國ハ將軍其他ノ地方高官ニシテ邦交上不都合ノ所爲アリテ露國ヨリ其旨申

立ラタルモノハ直ニ之ヲ免職スヘシ

清國ハ滿洲内地ニ於テ步騎ノ警察隊ヲ設クルヲ得但シ其兵數ハ露國ト協議ノ上之ヲ定ムヘク又其ノ兵器ニハ大砲ヲ除クヘシ而シテ右警察隊ノ事務ニ他國人ヲ使用スヘカラス

第六條 清國ハ前ニ承諾シタル成議ニ照シ清國北部ノ海陸軍訓練ニ他國人ヲ使用スヘカラス

第七條 地方保安ノ爲遠東租借條約第五條規定ノ中立地ニハ最寄地方官ニ於テ特別ノ規程ヲ設クヘシ

清國ハ追加議定書第四條ニ依リ清國ニ保留セラレタル金州ノ行政自治權ヲ拋棄スヘシ

第八條 露清交界ノ各地即滿洲、蒙古及新疆ノ塔爾巴哈臺、伊犁、喀什噶爾、葉爾羌、和闐、干闐等ノ地ニ於テハ清國ハ露國ノ承認ナクシテ鑛山鐵道及其他ノ事項ニ關スル利益ヲ他國若クハ他國人ニ許與スヘカラス又露國ノ承諾ナクシテ前記各地方ニ鐵道ヲ敷設スルヲ得ス、牛莊以外ニ在テハ他國人ニ土地租借ヲ許スヘカラス

第九條 清國ハ露國ノ軍費並ニ他列國要求ノ償金ヲ支拂フヘキモノトス而シテ露國ニ對スル償金ノ金額支拂期限及擔保ハ各國ト共同シテ之ヲ定ムヘシ

第十條 鐵道ノ破壞及會社技師ノ財産ノ掠奪竝ニ工業遲延等ニ對スル損害ノ賠償ハ清國ト鐵道會社トノ間ニ商定スヘシ

第十一條 前條ノ賠償額ニシテ清國政府ト鐵道會社間ニ協定セラレタル以上ハ其賠償金額ノ全部又ハ一部ハ他ノ利益即鐵道ニ關スル現條約ノ改正又ハ新利益ノ讓與等ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第十二條 清國ハ前ニ承諾シタル成議ニ照シ滿洲鐵道ノ幹線又ハ支線ヨリ北京ニ向ヒ長城ニ至ル鐵

道敷設權ヲ露國ニ許與スヘシ

露國外務大臣ハ楊公使ニ右條項ハ露國要望ノ最小限度ノモノナルニ付遲滞ナク之ヲ承諾スルヲ要スル旨ヲ強ク言明シタリ。之ト同時ニ露帝ハ清帝ニ答電トシテ、自分ハ清帝ノ主權ヲ害セントスルニアラズ滿洲ハ速ニ之ヲ還附セントス、唯事變ノ再發ヲ防キ邊疆ノ安寧ヲ保タンカ爲協定ノ必要アリト説キ、其締結ヲ速ニシ以テ兩國ノ舊交ヲ更ニ鞏固ニセンカ爲清國ニ於テ其全權委員ニ訓示スル所アラントヲ希望セリ。

二月二十七日小村公使ハ李鴻章ニ會見シ、各國ノ警告ヲ無視シテ露國ト特約ヲ締結スルノ危險ナルヲ説キタルモ、李ハ露國新提案ニハ清國ノ主權ヲ毀損シ領土上及財政上ノ讓與ヲ要求シ居ラスト答へ、清國ニシテ露國ノ要求ヲ容レザレハ露國ハ滿洲還附ノ提言ヲ撤回スヘク、又列國ヨリ露國ニ勸告スルトモ露國ハ之ヲ拒絕スヘキニ依リ此要求ヲ即諾スルヨリ外ニ良策ナキ趣旨ヲ述ヘタリ。

然ルニ西安ニ在ル清廷ハ日英米獨各國ニ懇請シ各國共同シテ露國政府ニ對シ之カ撤回ヲ迫ラシムルヲ適當トセルカ如ク、三月一日在京清國公使ハ加藤大臣ニ居中調停ヲ請ヒ來レリ。依テ加藤大臣ハ英米獨各國駐劄ノ帝國公使ニ訓令シテ本件ニ關スル任國政府ノ意向ヲ問ハシメ、同時ニ劉、張兩總督ニモ警告セシメタリ。

英國政府ニ於テハ露國政府ノ説明ヲ求ムル所アリタリ。然ルニ露國政府ハ在清公使ヲシテ李鴻章ニ向ヒ其提案ノ承諾ヲ迫ラシメタルカ、他方三月十一日在本邦「イズヴォルスキイ」公使ハ加藤外務大臣ニ對シ、滿洲ニ關シ露清間ニ未タ何等條約ノ締結セラレタルモノナク新聞報道ノ約案ハ捏造ニ過キス、露國カ清國ト結フヘキ特別協定ハ滿洲還附ノ爲撤兵ノ條

件ヲ定ムルノ趣旨ニ外ナラストノ辯明ヲ記述セル本國外務大臣ノ電報寫ヲ手交シタリ。

其後露國ハ其提案ニ修正ヲ加ヘ、三月二十六日ヲ限リ調印スヘク若シ之ヲ承諾セサレハ露國ハ自由行動ヲトルヘシト清國ニ迫リタリ。右修正ノ重ナルモノハ左ノ諸點ナリ。

第一條、第二條、第三條及第十一條ハ原案ノ儘

第六條及第九條ハ削除

第四條ノ清國軍隊ノ駐屯禁止ヲ廢シ、其兵數ノ外駐屯地ニ付テモ露國ニ協議ノ上之ヲ定ムルコトトシ

第五條ノ免職ヲ轉任ニ代ヘ、警察隊ノ大砲使用禁止ヲ「地方全ク平定セサル間」ト條件附ニシ、外國人ノ使用禁止ヲ清國人ノミヲ以テスルコトニ字句ヲ變ヘ

第七條ノ金州ニ關スル項ヲ削除シ

第八條ノ蒙古及新疆各地ヲ除キ

第十條ハ原案第九條ト合併シ字句ヲ變ヘ

第十二條ハ山海關、牛莊、新民廳鐵道敷設カ條約ニ違反セルモノナルニ依リ其報酬トシテ提案ノ支線敷設ヲ承諾スヘシトノ意味ニ書改ム

右露國ノ要求ニ付帝國政府ハ英國政府ト協議ヲ遂ケ英獨兩國ト同一行動ヲトルコトトシ、三月二十日加藤外務大臣ハ在京清國公使ノ來訪ヲ求メ、清國ハ宜シク指定ノ期限内ニ調印セス露國ヲシテ提案ヲ撤回スルニ至ラシムヘキコトヲ勸告シ、又右約定ノ承諾ニ伴ヒ生スベキ危險ノ結果ニ付莫ニ與ヘタル警告ヲ反覆説示シテ之ヲ西安及劉、張兩提督ニ電報セシメ、同時ニ小村公使ニ電訓シテ右ノ趣ヲ慶親王及李鴻章ニ傳ヘシメ、又小田切領事ニ對シテハ劉、張兩提督ニ十分勸告スル様訓令シタリ。

然ルニ北京ニ於ケル清國當路ハ露國ノ執レル威嚇的態度ニ恐レ調印スル外ナカルヘシトノ意向ニ傾キタルモ、西安清廷ハ日英米ノ斡旋ニ依リ調印ノ延期ヲ得ントシ、三月二十三日在京李盛鐸公使ヨリ帝國政府ニ右ノ次第ヲ申出テタルカ、加藤大臣ハ調印延期ノ無効ナルコト及清國ノ執ルヘキ良計ハ絶對的拒絶ニ在ルコトヲ説明シ之ヲ本國政府ニ傳達セシメタリ。

於茲三月二十四日加藤外務大臣ハ在露珍田公使ニ對シ左記趣旨ヲ露國政府ニ申入ルヘキ旨ヲ電訓シタリ。

「帝國政府ノ得タル報道ニ依レハ露國政府ハ滿洲ニ關スル協定案ヲ清國政府ニ提出シ限定期日内ニ調印スヘキコトヲ求メタリト

右協定案中ノ或ル條項ハ滿洲ニ對スル清國ノ主權ヲ毀傷シ他國ノ權利利益ニ大影響ヲ及ホスモノカアルカ如キモ右ハ滿洲ニ於ケル露國カ從來保有セル權利ノ防衛ニ必要ナル適當ノ畛域ヲ超越シタルモノト思ハル

清國政府ハ露國要求ノ改善ヲ得ンカ爲ニ帝國政府及他列國ノ友誼的調停ヲ求メタリ帝國政府ハ以上ノ理由ニ依リ其當然ノ希望ナル東洋現在ノ權力平衡ノ保存ヲ完フセントセル念ニ基キ茲ニ露國政府ニ向テ其協定ヲ他列國ノ權利利益ニ適應セシムルノ得策ナル所以ヲ切言スルハ日露ノ友誼ニ副フモノナリト思考ス而シテ帝國政府ニ於テハ各方面ヨリ見テ極メテ希望スヘキ成果ヲ得ンハ本案件ヲ北京ニ於ケル列國代表者會議ニ提出シテ協定スルニ如カサルコトヲ信ス」

珍田公使ハ翌二十五日露國外務大臣ニ面會シテ右ノ趣旨ヲ開陳シタルニ、同大臣ハ兩獨立國間ニ於テ談判中ナル案件ニ關シ公然此種ノ通牒ヲ受クルコトハ之ヲ辭セサルヘカラスト告ケタル後、日露兩政

府間ニ意思ノ疏通ヲ保タンコトハ自分ノ希望ナル旨ヲ言明シ、本協定ニ付テハ勅命モアリ又國家ノ威嚴上ヨリモ之ヲ許ササルモ露國カ滿洲ヨリ撤退セントスル決心ハ他國ヨリ阻碍セラレサル限リ依然變ラス、露清協約ニ對スル露國ノ目的ハ撤退ヲ實行スルノ手段ヲ求メントスルニ在リ、該條約ノ一時的性質ノモノニシテ其條款ニハ清國ノ主權及他國ノ權利利益ヲ侵害スル點ナク約定締結ノ上ハ直ニ日本ニ通報スヘシ、又日本政府ノ意ニ滿タサル點アリトモ兩政府間ニ何等カノ妥協ノ道アルヘシト信スル旨ヲ述ヘ、最後ニ滿洲問題ハ全然露國ノミニ關係スル案件ナルカ故ニ北京會議ニ附スヘシトノ提言ハ露國カ從來遵奉シ來リタル一般原則ト相容レサルモノナリトテ之ヲ拒絕セリ。

帝國政府ハ右露國政府トノ交渉ノ次第ヲ清廷及清國要路ニ通知シ且ツ在京清國公使ニ對シ、英國政府ノ勅告通り滿洲協約ノ正文ヲ北京使臣會議ニ提出スルカ若クハ少クトモ今後日本政府カ露國ト交渉スルニ當リ其條款ヲ引用シ得ル様公然日本政府ニ提出スル様勸告シ之ヲ清廷ニ取次カシメタリ。

清國ニ於テハ皇帝ヨリ在露楊公使ニ露國要求ニ調印スヘカラサルコトヲ訓令スルト共ニ、露帝ニ對シ更ニ約定案ヲ修正アリ度旨ノ親電ヲ發シタリ。

然ルニ露國側ニ於テハ外務大臣ハ清國公使接見ヲ拒ミ、他方在清露國公使及露清銀行支配人「ボコチロフ」ハ李鴻章ヲ脅嚇シ「ウイッテ」モ清國公使館員ニ四月一日ノ會議ニ於テ滿洲併合ヲ決スヘシ等ノコトヲ告ケ只管調印ヲ迫リタリ。

於茲清國政府ハ再ヒ帝國政府ニ助言ヲ求メ來レルニ依リ、四月一日加藤外務大臣ハ清國ニ於テ自動的ノ行動ニ出ツルノ非ナルヲ論シ協約案ヲ各國ニ提出セントヲ勸告シタリ。而シテ同日慶親王及李鴻章ハ露國公使ニ對シ公文ヲ以テ、楊公使病氣ノ爲全權タル後任公使ヲ任命スヘキコト、日英米獨四國

ヨリ滿洲問題ヲ北京使臣會議ニ附スヘシト勸告アリタルコト、露國政府ハ日本政府ニ對スル回答ニ於テ本協定中ニ清國ノ主權ヲ損シ又ハ列國ノ利益ヲ害スヘキ條款ナキ旨ヲ聲明シタルニ付約定中ノ右様傾向アル部分ヲ削除セラレタキコトヲ請フト共ニ清國ノ難狀ヲ訴ヘテ露國ノ讓歩ヲ求メタルニ、露國公使ハ右公文ノ接受ヲ拒ミタリ。

帝國政府ハ在露珍田公使ニ對シ、露國ノ回答ニ對シテハ差向キ意見ノ表示ヲ保留スヘキモ「ラムスドルフ」伯ノ陳述セラレタル所ニハ同意シ難キ旨ヲ露國外務大臣ニ通牒スヘキコトヲ命シタリ。

然ルニ右申入ニ先立チ露國政府ハ四月五日ノ官報ヲ以テ、露國ハ滿洲協約ニ關スル商議ヲ斷絶シ其累次聲明セル當初ノ政策ヲ恪守シテ時局今後ノ發展ヲ見ントスル旨ヲ宣言シ、同八日在京「イズヴェルスキイ」公使ハ左ノ通牒ヲ加藤外務大臣ニ送り越シタリ。

『露清兩國間ニ別個ノ協商ヲ締結セントシタルハ露國ノ聲明シタルカ如ク滿洲ヲ清國ニ還附スル意思ヲ漸次實行スルコトニ可成速ニ着手スルノ目出テタルモノナリ此目的ノ爲ニハ今ニ於テ清國ト合意ノ上滿洲撤兵ノ條件ヲ定メ得ヘキヤ否ヤヲ確定スルノ必要アルハ明瞭ナリ然ルニ各種ノ報道ニ徴スルニ現今ノ事情ニ於テハ斯ノ如キ協商ハ清國ノ利益ニ關スル露國ノ友好的意圖ヲ表彰スルノ具トナラスシテ却テ露國ヲシテ各般ノ困難ニ遭遇セシムルニ至ルナキヲ保セサルニ付露國政府ハ當ニ該協商ノ締結ヲ清國政府ニ對シテ主張セサルノミナラス尙進シテ之ニ關シ今後一切ノ商議ヲ斷念スルモノナリ本問題ノ經過竝ニ現下清國ニ於ケル一般ノ形勢ニ對スル露國政府ノ見地ハ不日發表セラルヘキ詳細ノ公表ニ依リ明ナルヘシ露國政府ハ其累次聲明シタル當初ノ政策ヲ依然恪守シ以テ徐ニ時局今後ノ發展ヲ待タントス』

右ト同趣旨ノ通牒ハ關係列國ニモ送致セラレ、斯クシテ滿洲問題ニ關スル露清協商問題ハ茲ニ一段落ヲ告ケタリ。

第三節 滿洲ニ關スル第二回露清協約(滿洲還附協約)ノ締結

第一項 李鴻章ノ交渉

滿洲ニ關スル露清密約ハ前節ニ述ヘタル經緯ヲ以テ打破セラレタルモ露國ノ滿洲ニ於ケル軍事的占領ハ依然繼續セラレ其野心ハ底止スヘシトモ見エス、殊ニ明治三十四年六月歐洲ノ新聞ハ北清事變ニ關スル北京講和談判ニ於テ償金問題ノ落着スルト共ニ滿洲問題ニ關スル露清談判ノ再開セラレヘキヲ報スルアリ、更ニ七月ニ入り露國大藏大臣「ウイッテ」ノ滿洲視察ニ關聯シ李鴻章カ「ウイッテ」ヲ北京ニ招待セリトノ説、「ウフトムスキイ」公カ滿洲嶺山ノ露清共同經營ヲ提議セリトノ説等行ハレタルヲ以テ、帝國政府ハ露國ノ行動ニ一層深甚ノ注意ヲナスト共ニ滿洲問題解決ノ方法ヲ考究シ、就中少クトモ滿洲保全ノ爲獨占ナル領土上若クハ財政上ノ讓與ヲ他國ニ許スルヲ許スヘカラストノ原則ヲ以テ英國政府トモ協議スル所アリタリ。

八月北京ノ講和談判モ終局ニ至リ各國軍隊相踵テ北清ヨリ撤退スルニ及ヒ、張之洞、劉坤一等ハ速ニ露國ヲシテ滿洲ヨリ撤兵セシメ以テ滿洲問題ヲ終結セントシ、帝國政府ニ對シ各國ト協議シテ滿洲撤兵ノ期日及方法ヲ露國ニ質問センコトヲ懇請シ來レリ。之ニ對シ帝國政府ハ此際各國ヨリ露國ニ對シ右様措置ヲトルハ時機宜シカラズ、清國ハ宮廷ノ還京及中央政府ノ組織ヲナシ、滿洲ニ於テハ露國撤兵ノ曉何時ニテモ之ヲ承クルニ差支ナキ準備ヲ整ヘ以テ露國ニ其屢次ノ宣言ヲ無視スルノ口實ヲ與ヘ

サルコト刻下ノ急務ナル旨ヲ答ヘ置キタリ。

然ルニ八月十三日小村公使ハ滿洲撤兵ニ關シ李鴻章カ露國公使ト交渉ヲ開始セル旨ヲ電報シ來レリ、即清國皇帝ハ列國ノ助力ニ依リ滿洲ヨリ露兵ヲ撤退セシムルニ努ムヘキ旨ノ上諭ヲ慶親王及李鴻章ニ下シタルニ依リ李鴻章ハ露國公使ニ交渉シタルニ、同公使ハ露清兩國ノミニ關スル問題ナルニ付交渉ノコトハ秘密トシ他國ノ提言ニ耳ヲ藉ササルコト及交渉中絶中ノ滿洲ニ關スル協定ヲ無條件ニテ清國カ受諾スルコトヲ保證スルニ非サレハ露國政府ハ談判再開ニ着手セサルヘシト思考スル旨ヲ答ヘ、李鴻章ハ差向キ交渉ヲ急ク意向ナキ趣ナリキ。

右ニ關シ在清小村公使ハ慶親王ニ對シ本件滿洲協約問題完結ノ爲急速ノ手段ヲトルコトノ危險ナルコトヲ警告シ、且ツ本問題ハ日本ノ休戚ニ關スルコト清國ニ讓ラサル程ナルヲ以テ豫メ日本ト協議スルノ必要ナル旨ヲ勸告スル所アリタリ。

而シテ張、劉兩總督ヨリ帝國ニ對シ、帝國政府ニ於テ露國ニ對シ滿洲ニ於ケル露軍モ直隸ニ於ケル各國軍同様ニ撤退スヘク又條約ヲ締結スルニハ各國ヲシテ與リ知ラシムルヲ要スル旨ヲ申入ラレ度旨申出テタルカ、帝國政府ハ出先官憲ヲシテ右小村公使ノ爲シタル勸告ト同一趣旨ニテ時機ヲ待ツヘキ旨ヲ回答セシメタリ。

其後十月七日慶親王カ在清日置代理公使ニ内話セル所ニ依レハ十月五日露國公使ハ清國政府ニ對シ協定ニ付左記要領ノ提言ヲ爲シタル趣ナリ。

- 一、滿洲問題ニ關シ改メテ新案ニ基キ協定スルコト
- 二、露國ハ東三省全部(牛莊港ヲモ含ム)ヲ清國ニ還戻ス、牛莊鐵道ハ清曆本年中ニ還附スルコト

三、露國ハ清曆本年中ニ其軍隊ヲ盛京省ヨリ撤退スルコト
 四、黒龍江地方及吉林省ハ協定ノ日ヨリ二年ヲ經タル後漸次撤兵スルコト
 五、清國軍隊ノ新編成ハ露國軍事官ト相談ノ上盛京將軍之ヲ定ムルコト、但シ清國軍隊ノ大砲使用
 禁止ヲ條件トス

右報告ニ接スルヤ十月九日小村新任外務大臣ハ在清日置代理公使ヲシテ慶親王ニ對シ、曩ニ本大臣ノ
 北京ニ在リテ親シク説明セル通り本問題ニ關シテハ倉卒ノ決定ヲ爲スコトナク重要ノ交渉ハ豫メ日本
 政府ニ相談スヘク日本政府ハ必要ノ補助ハ喜ンテ之ヲ與フヘキ旨ヲ通セシメ、又十月三日在京清國公
 使李盛鐸ニ對シ西安政府ヘ轉電ノ爲、曩ニ露國カ滿洲問題ノ交渉ヲ中絶セシ際清國ハ露國カ今後本問
 題ニ關シ新ニ提言ヲ爲シタルトキハ直ニ之ヲ日本ニ通知シ日本政府ノ與ヘタル忠言ニ據テ行動スヘキ
 旨ヲ聲明シタルカ、右聲明ノ趣旨タル獨リ清國ニトリ最良ノ策タルノミナラス東亞大局ノ益タルヘキ
 フ以テ帝國政府ハ今猶之ヲ重視スルモノナルニ依リ清國ハ右聲明ニ準據シテ離レサランコトヲ希望
 ス、又清國政府ヨリ提開スル場合ニモ先以テ日本政府ニ豫議セラルヘキコト勿論ナリトノ趣旨ノ覺書
 フ交付シタリ。

而シテ右露國提議ノ大體ニ付通報ヲ得ルヤ十月二十一日小村大臣ハ在清帝國公使ニ對シ、新提議ノ各
 條款ニ付テハ正確ナル報道ニ接セサル以上意見ヲ發表スル能ハサルカ本提議ハ従前ノモノヨリ幾分改
 善セラレタルモ其條件ハ清國ニトリ満足ノモノト思ハレス、右第四項撤兵終了時日不明確ニシテ實際
 ニハ永久占領トナルヘキヲ以テ吉黒兩省撤兵ハ協約締結後一年以内ニ完了スルコトニ修正シ、第五項
 ハ清國ノ主權ヲ削略スルモノニシテ清國ノ自衛手段ト匪賊ノ復起防止ノ手段トヲ奪フモノナルニ依リ
 至レリ。

露兵撤退終了ノ日ヨリ之ヲ失効スルモノトスヘク、若シ此修正ヲ得サルニ於テハ交渉ヲ遷延セシムル
 ノ得策ナルコトヲ慶親王ニ傳フヘキ旨電訓シタリ。

而シテ劉坤一ヨリモ同様意見ノ上奏アリ、交渉ノ結果十月末ニハ露國提議ハ左ノ通り修正セララルニ
 至レリ。

- 一、滿洲及牛莊鐵道ノ還附期限ハ清曆ヲ露曆トシ右年内ニ終了スルコト
- 二、盛京省ノ撤兵ハ露曆一九〇二年内ニ終了スルコト
- 三、吉黒兩省ノ撤兵ハ一九〇二年及一九〇三年ニ終了スルコト
- 四、清國軍隊ノ編成ハ三省將軍ヨリ其員數ヲ露國ニ知照ス但シ大砲使用禁止ハ原案通り
- 五、山海關牛莊鐵道還附條件ハ左ノ通り

該鐵道ニ關シ露國ノ支拂ヒタル費用辨償
 鐵道護衛ノ爲外國兵ヲ用ヒサルコト
 外國技師ヲ使用セサルコト

新民廳以外及遼河以東線路ヲ延長セサルコト
 右ノ外滿洲ニ於ケル鑛山採掘權許與ニ關スル露清銀行ノ要求
 李鴻章ト「レッサル」公使トノ交渉ニ依リ右協約ハ殆ント調印ノ運ニ至リ居リタル處、十月三十日李鴻
 章罹病シ次ヲ十一月八日逝去セル爲本交渉ハ停頓スルニ至レリ。

第二項 日露間交渉

十月三十日在露杉村代理公使ハ初メテ露國外務大臣「ラムスドルフ」伯ト滿洲問題ニ關シ會談シ、同代

理公使ヨリ日露兩國間ニ何等誤解ヲ避クル爲清國トノ交渉ノ性質如何ヲ告知セラレンコトヲ希望シタルニ、同大臣ハ前同協商ノ際ニ陳述セルト同一ノ理由ヲ以テ通報ヲ與フルコトヲ拒ミタルカ、内密ノ含トシテ目下商議中ノ約定ハ撤兵方法ニ關スルモノニシテ清國側ヨリ切望セルニ因ルモノナルコト、又牛莊鐵道ニ關スル賠償金ハ曩ニ北京會議ノ際露國要求ノ償金額中ニ算入セザリシニ依リ今回本件ヲモ包含セシムルモノナルコト等ヲ語レリ。

十一月二日小村大臣ハ杉村代理公使ニ電訓シ露國外務大臣ニ對シ、日本政府ハ東洋問題ニ關スル其利益ニ鑑ミ滿洲約定ノ提案既ニ調印ヲ經タルヤ否ヤニ付通報ヲ受クルコトヲ得ハ幸甚ナル旨ヲ面陳シ、若シ相變ラス通報ヲ肯セサル場合ニハ帝國政府ハ露國外務大臣カ「該約定ハ他國ノ條約上ノ權利若クハ利害ヲ毀損スヘキモノヲ包有セス」トノコトヲ通報シ以テ帝國政府至當ノ懸念ヲ解キ得ラレンコトヲ希望スル旨ヲ述ヘ、又帝國政府ハ一九〇一年四月二十三日北京會議ニ於ケル露國公使「ギルス」氏ノ何等條件ヲモ附セサル聲明(註)ヨリ出テタル協信(アンダースタンディング)ニ鑑ミ露國カ鐵道損害ニ對シ此上賠償ヲ要求スル意アリトノ風説ノ無根ナランコトヲ希望スル旨ヲ申入レシメタリ。

(註)「ギルス」氏ハ伯モ本國政府ヨリ受領シタル電報ニ依リテ今日ヨリ露國償金額ノ概算額ヲ表示スルヲ得タリ「戰事費及鐵道破損費」一億七千萬留ニシテ三月十五日以後戰事費一ヶ月二百萬留ナリ然レトモ私人要求額ニ至テハ同公使猶言定スルヲ得ス」
十一月四日杉村代理公使ハ右訓令ヲ執行シタルニ、「ラムスドルフ」伯ハ外務大臣トシテハ本件ニ關シ一切談スルヲ得ス其調印ノ了否ヲモ洩シ難キモ小村大臣ノ友人トシテ通報シタシトテ、協議中ノ協約ハ一九〇〇年八月二十五日ノ露國聲明ヲ現實ニセルモノニ過キス、即行政權還附及滿洲ヨリ漸次撤兵

ノ順序ヲ規定スルモノニシテ他國ノ條約上ノ權利及利益ニ影響ヲ及ホスカ如キ事項ヲ含マズ、調印ハ未了ニシテ李鴻章病氣ノ爲何時調印ノ運ニ至ルヤ豫想シ難シ、鐵道賠償金ハ「ギルス」ノ聲明ニハ含ミ居ラス、今回ノ要求ハ露國カ管理中支出セル保存費、修繕費等百二十五萬留ニシテ擾亂ノ損害ニ非サレハ賠償トイフヲ得ズ賠償(レデムプジョン)ニ過キス、若シ協約ノ締結猶延延セハ隨テ右費用ノ要求額モ増加スヘキモノナリ、本協約ノ締結セラレタルトキハ之ヲ公表シ且ツ日本ニモ通報スヘシ、而シテ滿洲ニ於ケル清國軍隊ノ兵數ヲ知ルコトハ之ニ對スル國境ニ於ケル露國軍隊ノ數ニ關係アルカ故ニ將來ニ於ケル平和擔保ノ條件トシテ必要ナリ等ノコトヲ告ケタリ。

右ニ對シ同月八日小村大臣ハ在露公使ニ電訓シテ「ラムスドルフ」伯ニ對シ、地理ノ關係上日本カ極東ニ於ケル權力ノ平均ニ關シ慎重戒心ノ態度ヲトルハ已ヲ得サルモノナル處、右態度ハ決シテ攻撃的ニアラスシテ純然タル防禦的ノモノナルコトヲ指摘スルト共ニ伯ノ確言カ我方ノ懸念ヲ解クノ用ヲナシタルコトヲ述ヘ、伯ノ辯法ト同様ニ我方モ一個人ノ資格ニ於テ友好ノ精神ヲ以テ日露間ノ好誼ヲ増進スル目的ヨリ滿洲問題ニ關スル我方ノ意見ヲ述ヘシニ、最短確定期間内ニ撤兵ヲ完了スルコトニ伯ノ絶大ナル勢力ヲ及ホサルコト及清國軍隊ノ武裝及編成ニ關シテハ露國ハ清國カ外人ノ生命財產ノ保護等秩序維持ノ國際的義務履行ヲ碍ケシムル如キ又清國ノ自衛ノ力ヲ剝奪スルカ如キ條件ヲ課セサルコトヲ希望スル次第ナリトノ旨ヲ貫徹スル様申入レシメタリ。

之ニ對シ十一月十日「ラムスドルフ」伯ハ杉村代理公使ニ對シ、小村大臣ノ勸告ハ決シテ慮外ニ置カサルヘキモ露國ノ提議ハ關係官廳ノ獻策、露國ノ必要、清國ノ事情等一切關係アルモノヲ慎重熟慮シ中庸ヲ得シムヘキヲ努メタリ、撤兵ニ付將來擔保ノ條件ヲ協定スルノ件ハ獨ノ「ビローロー」、佛ノ「デル

カッセ」ノ同意ヲ得タルモノナリ、本協約ハ露國ニ於テ締結ヲ急ク必要ナク又成立セストテ別ニ窮セサ
レトモ出來得ル限リ速ニ撤兵スルノ希望ハ小村大臣ト同様ナルニ依リ清國ノ求ニ應ジ最終決定ノ提案
ヲ出シタル次第ナル旨ヲ述ヘ、次ニ第三國ノ行動ノ爲南清總督カ本協約締結ニ反對シタルヲ以テ交渉
遷延セリト稱シ、又日本新聞カ反露的ナルニ付其論調ヲ和クル方法アラシコトヲ希望セリ。

右末段ニ關シ小村大臣ハ日本新聞ニ非親和的論調アリトスルモ日露兩國ノ關係ニ影響アラサルヘキ旨
ヲ説明セシメタルモ露國外務大臣ハ十二月八日杉村代理公使ニ對シ、日本新聞ハ依然トシテ敵愾的ニ
シテ「イゾヴォルスキイ」ノ報告ニ依ルモ其勢力大ナリトコトナリ又日本海軍ハ目下朝鮮海峽ニ於テ
活潑ナル示威運動ヲナシ居レリト其息止ヲ希望セルヲ以テ、小村大臣ハ十二月十四日在露帝國公使
ヲシテ日本新聞ノ非親和的態度ハ殆ント全ク滿洲問題ニ關シ至大ノ疑懼アルニ職由スルモノト信スル
モ我政府ハ新聞紙ノ敵愾的所論ニ動かササルコトナキヲ保障シ、海軍ノ示威運動ナルモノハ例年ノ定
期普通航運演習以外ニ何等ノ企圖又ハ實行セラレタルモノナク又從來慣行ノ日本在留民保護ノ爲韓國
ニ派遣シアル軍艦ノ外國沿岸ヲ巡航シタルコトナキコトヲ保障セシメタリ。

第三項 慶親王ノ修正案

李鴻章ノ死後慶親王ニ於テ露國公使「レッサル」ト交渉セルカ、十二月九日慶親王ノ在清内田公使ニ内
示セル協約露國案及慶親王カ欲セル修正案ハ左ノ如シ。

露國案

露西亞國皇帝及清國皇帝ハ千九百年中清國ニ於ケル變亂ヨリ損傷セラレタル露清兩國間ノ友好ナル
關係ヲ敦睦ナル基礎ノ上ニ再設スルノ希望ヲ有シ茲ニ滿洲ニ關スル一切ノ事件ヲ妥辦スルノ目的ヲ

以テ各其全權ヲ簡派セリ

第一條 露國皇帝ハ清國皇帝ニ對シ重ネテ其友好敦睦ノ徵證ヲ表示センコトヲ欲シ且ツ露國及滿洲
ノ國境界一帯ノ地ニ於テ戰爭ト平和ナル露國臣民ニ對スル攻撃トヲ醸生シタル一切ノ事情ヲ不問
ニ附シ滿洲全疆ヲ清國ノ治權ニ還附ス右讓土ハ露國占領以前ノ狀態ニ復シ清國ノ領土ニ編入シ清
國官吏ノ管理ノ下ニ置クヘシ

第二條 清國政府ハ滿洲ヲ收復シ其行政ヲ復行スルニ付テハ露曆一八九六年八月二十七日露清銀行
ト締結セル協約ノ總テノ條項ヲ永遠ニ確認シ且ツ遵守スヘシ、且ツ清國政府ハ右協約第五條ニ從
ヒ鐵道及滿洲ニ在留シ露國官憲ノ下ニアリテ保護ヲ受クルノ權利アル鐵道吏員其他一切ノ個人並
ニ此等人員ノ職業ヲハ其全力ヲ盡シテ保護スルノ義務ヲ承認ス、清國政府ハ此ノ承認ヲ與フルニ
因リ露國政府ハ此後ノ變亂亦ハ他國ノ行動ニ依リ妨ケラレサルニ於テハ漸次ニ滿洲駐屯ノ露國軍
隊ヲ悉ク撤退スヘシ右軍隊ノ撤退ハ左ノ方法ニ依リ遂行セララルヘシ

イ、盛京省西南部遼河ニ至ル地方ニ駐屯セル露國軍隊ハ露曆一九〇一年內ニ悉ク撤退セララルヘシ
又右地方ニ於ケル鐵道ハ清國ニ還附セララルヘシ

ロ、盛京省殘部ニ駐屯ノ露國軍隊ハ一九〇二年內ニ悉ク撤退セララルヘシ

ハ、吉林省及黑龍江省駐屯ノ露國軍隊ヲ撤退シ得ルヤ否ハ一九〇三年內ニ查看セララルヘシ
第三條 清國政府ハ客年ノ如キ動亂ノ再發ヲ豫防スルニ於テ露國ト同一ノ希望ヲ有シ而シテ客年ノ
動亂ハ露國ト隣接ノ省內ニ駐屯セル清國官兵ニ依テ惹起サレタルモノナルカ故ニ露清兩國政府ハ
清兵ノ員數並ニ其駐劄地ハ此等諸省ノ總督ニ於テ露國軍務官ト共同シ之ヲ決定スヘキコトヲ約

若シ清國ニ於テ上記三省内ニ大兵ヲ駐屯セシムル時ハ露國モ亦勢ヒ其國境ノ兵數ヲ増加セサルヲ得ス而シテ兩國孰レモ之カ爲ニ何等ノ利益ヲモ受ケサルヘキカ故ニ清國ハ總督カ露國軍務官ト協議ノ上決定シタル兵數ヲ増加シ又ハ他ノ地方ヨリ滿洲ニ軍隊ヲ送ラサルヘシ
警察隊ヲ設ケテ滿洲ニ於ケル秩序ヲ維持スルノ件ニ關シテハ各省總督ハ東清鐵道會社ノ所有ノ地區ヲ除テ主トシテ馬步捕隊ヲ訓練シ警察隊トシテ之ヲ使用スヘシ但シ警察隊ハ大砲ヲ使用スルヲ得ス

第四條 露國ハ一九〇〇年九月下旬以來同國軍隊ノ占領及保護ノ下ニ在リタル山海關、營口及新民廳間ノ鐵道全部ヲ原所有者ニ還附スルコトニ同意スヘシ但シ清國ニ於テ左ノ條款ニ同意スルコトヲ要ス

- 一、別國軍隊カ右ノ如ク還附セラレタル鐵道ヲ占領、保護、建設若クハ維持スルコトヲ許ササルヘキコト、露國軍隊ニ依リ明渡サレタル地方ニ於テ鐵道ノ保護ヲ必要トスル事項ニ對シテハ專ラ清國守備兵ノミニ於テ之カ責ニ任スヘキコト
- 二、上記鐵道ノ完成及維持ニ付テハ常ニ一八九九年四月十六日露英間ニ締結セラレタル協約及「シンヂケート」ハ從來ノ各契約ヲ遵守スヘク彼等ハ如何ナル口實ノ下ニモ鐵道ヲ占有シ若クハ其支配權ヲ占取スルコトヲ許サレサルヘキコト
- 三、露國政府ノ同意ナクシテハ該鐵道ヲ延長シ若クハ滿洲南部ニ於テ其枝線ヲ敷設セサルヘキコト、營口ヨリ遼河ヲ横リ架橋セサルヘキコト並ニ清國鐵道ノ終點ヲ該地點ニ置カサルコト

四、露國政府カ遼附スヘキ山海關、營口及新民廳間ノ鐵道修繕及維持ノ爲ニ被リタル失費ハ償還セラルヘキコト

右露國案ニ對シ慶親王カ修正セントセシ點ハ左ノ如シ。

前文及第一條 原案ノ儘

第二條 「若シ他國ノ行爲ニ依リ妨ケラレサルニ於テハ」ナル一句ハ「若シ他ノ事情ニ依リ妨ケラレサルニ於テハ」ト改ム

イ、「露曆一九〇一年以内」ハ「本協約調印後四ヶ月以内」ト改ム

ロ、「露曆一九〇二年以内」ハ「次ノ四ヶ月以内」ト改ム

ハ、「露曆一九〇三年以内」ハ「又其次ノ四ヶ月以内」ト改ム

「撤退セラレ得ルヤ否ヤハ查看セラルヘシ」ヲ「撤退セラルヘシ」ト改ム

第三條 「右兵員ハ匪徒ヲ鎮壓シ或ニ地方ノ平和及秩序ヲ維持スルニ足ルモノナルヘシ」トノ辭句ヲ「露國軍務官ト共同シ之ヲ決定スヘキコトヲ約ス」ノ下ニ加フ、「亦他ノ地方ヨリ滿洲ニ軍隊ヲ送ラサルヘシ」トノ辭句並ニ末節ノ大砲使用禁止ノ文句ヲ削除ス

第四條 「清國ニ於テ左ノ條款ニ同意センコトヲ要ス」トノ文句ヲ「同意ス」ト改メ、第一項「別國軍隊」ヨリ「許ササルヘキコト」ノ辭句ニ至ル迄ノ文句ヲ削除シ、右ト同シ項ニ於テ「清國守備兵ノミ」トノ辭句ハ之ヲ清國ト改メ、且ツ「而シテ清國ハ之等鐵道ノ敷設並ニ維持ヲ他國ニ依頼セサルヘシ」トノ文句ヲ原文第二項ノ末尾ニ加フルコト

第三項ハ左ノ通り改ムルコト

「將來鐵道ヲ延長シ又ハ滿洲南部ニ於テ枝線ヲ敷設シ、或ハ營口ニ於テ橋渠ヲ架設シ又ハ鐵道終端ノ位置ヲ變更スル等ノ計畫ヲ爲スニ方リテハ此等ノ事柄ハ相互ノ協議ニ依ルヘシ」

右ニ關シ帝國政府ノ助言セル修正ハ左ノ通り。

第二條 (ロ)ニ於テ「盛京」ノ語ノ後ニ「及吉林省内」ノ語ヲ加フルヲ要ス

「他ノ事情」ノ修正ハ露國ノ占領ヲ無限ニ延長スルノ門戸ヲ開クモノナルヲ以テ「又ハ他國ノ行動ニ依リ」ノ語ヲ削除スルコト望マシ

第三條 撤兵後滿洲駐屯ノ兵數ニ付露國ニ通告ヲ與フルコトニ同意スルモ可ナレトモ其兵數ヲ決定スルニ付露國ノ發言權ヲ約諾スヘカラス

「東清鐵道會社所有ノ地區ヲ除キ」ナル文句ノ精確ナル意義ハ了解シ難シ右ハ修正ヲ要スヘキカ

第四條 第三項以外ノ修正案ハ極力固執スルヲ要ス

第三項ハ全然削除スルコトヲ堅ク主張スルヲ要ス
右ノ修正ヲ固執シテ動カサルトキハ露國ハ確ニ其要求ヲ變更スヘキハ疑ヲ容レズ、又鑛業及商工業其他此種ノ事項ニ關スル專占的讓與ハ總テ他國ノ條約上ノ權利ヲ侵害セントスルモノナルヲ以テ今回ノ條約ニ關聯シテ右様ノ讓與ヲ露國ニ許與セザルコトヲ要ス

内田公使ハ十二月四日右ヲ慶親王ニ通シ説明ト警告ヲ與ヘタル結果、同親王ハ我勸告ノ諸點ヲ基礎トシテ修正案ヲ作り之ヲ露國公使ニ提出スルコトセリ。然ルニ其際質問ノ結果露清銀行トノ間ニ滿洲ニ於ケル鑛業等ニ關スル讓與ノ協定問題交渉中ナルコト明トナレリ。

第四項 滿洲ニ於ケル商工業上ノ利權ニ關スル協定問題

本件第二回滿洲協約締結ニ關スル交渉ヲ開始スルニ當リ露國ハ滿洲ニ於ケル商工業上ノ利權ヲ露國ニ特許スルノ協定ヲ結フヘキヲ條件トセルヲ以テ李鴻章ハ之ヲ承諾シ、露清銀行「ボコチロフ」ト協定ヲ締結セントスルニ至レリ。

右交渉ノ内容ハ初メ不明ナリシモ、十月小村大臣ハ鑛山探掘專有權ハ明ニ列國ト清國トノ間ノ條約ニ背反スルノミナラス我方ノ利益ニ障害アルヲ以テ右讓與防遏方ニ付在清公使ニ訓令スル所アリシカ、十一月七日在京清國公使ニ對シ、右專有權認許ハ條約定款ニ背反スルノミナラス清國ノ他ノ方面ニ於テ同様ノ要求ヲ爲スノ口實ヲ他ノ列國ニ與フルコトアルヘキニ依リ之ヲ認許スヘカラストノ強硬ナル勸告ヲ劉、張兩總督ヲ經テ清廷ニ電報スル様申入レタリ。

慶親王ハ露國トノ交渉ノ衝ニ當ルヤ本協定案ニ對シテモ修正ヲ提出シタル趣ニシテ、十二月其内田公使ニ内示セル協定案ハ大要左ノ如シ。

清國カ滿洲ニ於テ鑛山ヲ探掘シ又ハ總テノ工業上ノ企業ヲ創興シ之ヲ發達セシメントシ而モ獨力ヲ以テ着手スルコト能ハサル時ハ露清銀行ハ其事業ヲ執ルニ優先權ヲ有スヘシ、而シテ露清銀行ニシテ其事業ヲ執ルヲ辭スルトキハ他ノ個人又ハ會社ニ依テナサルヘシ

然レトモ苦シ露清銀行カ右事業ヲ執ルトキハ東三省ノ各總督及北洋通商大臣ハ之ニ付充分調査ヲ遂ケ且清國皇帝ノ勅允ヲ得タル上ニテ事業ヲ始ムヘシ又右讓與ノ事實ノ爲滿洲ニ於ケル商業貿易ヲ阻礙セザル様注意スヘシ

右ニ關シ十二月十四日内田公使ハ訓令ニ基キ慶親王ニ對シ、斯ル專占的讓與ハ其何タルヲ問ハス總テ他國ノ條約上ノ權利ヲ侵害スルモノナルコトヲ警告セルカ、清國側ニ於テハ既ニ本協定ニ關シ四回ノ

修正ヲナシ露國ノ回答ヲ待チ居ル次第ナルヲ以テ本協定ニ依リ速ニ滿洲還附協約ヲ成立セシムルヲ緊要ト認ムルノ意嚮ヲ持シタリ。

依テ帝國政府ハ翌三十五年一月二十五日在支公使ニ訓令シテ、右協定中專占の又ハ優先の特權ヲ與フル分ハ諸條約ノ條約上ノ權利ヲ侵害スルモノナリトノ理由ニ依リ右各國ヨリ重大ナル抗議ヲ惹起スヘク且ツ右諸國ヨリ同様特權ノ要求ヲ差向ケラルヘシト述フルト共ニ、假令滿洲協約締結セラレトモ右協約ト此協定トノ間ニハ必要離スヘカラサル關係ナキヲ以テ訓令ヲ延引スル様慶親王ニ助言セシメ、更ニ二月四日ニ至リ、右協定ハ當ニ露國カ滿洲ヨリ撤退スルニ必要ナル先決要件ニ非サルノミナラス右撤退トハ相關聯スル所毫モナク、從テ露國ニシテ若シ右協定ノ締結ヲ以テ滿洲協約締結ノ成否條件トナスニ於テハ右ノ行動タル曩ニ同國カ滿洲ヲ清國ニ還附スルコトニ關シ任意ニ與ヘタル無條件的確言ヲ履行スルニ對シ今ニ至リテ補償ノ性質ヲ帶ヒタル條件ヲ課セント欲スルモノナリ、且ツ本協定ハ露清銀行ノ名義ヲ以テスルモ其實清國ノ廣大ナル部面ニ於テ專占の特權ヲ露國ニ賦與スルモノナリヲ以テ明ニ他國ノ條約上ノ權利ヲ無視シ且ツ機會均等ノ原則ヲ破ルモノナリ、此故ニ露國ニ對シ滿洲協約ト本協定トヲ分離シテ協約ノ締結ヲ提議スヘク若シ露國カ右提議ヲ拒絕シ且ツ撤兵ヲ遲延スルニ於テハ日本政府ハ滿洲撤退ニ關スル同國ノ確言踐行ニ關シ露國ニ交渉スルノ措置ヲトルヘシ、然レトモ清國ニシテ日本及他國ニ對スル其條約上ノ義務ヲ顧念セス本協定ニ同意スルニ於テハ日本政府ハ該協定カ露國ノ利益ヲ設定スヘキ容易ナラサル利權不均等ヲ矯正スル爲清國政府ニ如何ナル要求ヲナスヲ要スヘキヤヲ考査スルノ不得已ニ至ルヘキ旨ヲ慶親王ニ申入レシメタリ。

本協定締結ニ關シ英米兩國政府ハ我方ト協働ノ方針ヲ以テ進ミ來レルカ、一月末英國政府ハ本協定ハ

他國ノ抗議ヲ避ケンカ爲ノ施計ニ外ナラサルニ付之ニ訓令セサル様清國政府ニ忠告シ、若シ右忠告ニ不拘該協定ヲ締結スルニ於テハ至當ノ補償ヲ要求スルノ不得已ニ至ルヘキ旨宣言センコトヲ其在清公使ニ訓令シ、米國政府モ二月四日右協定ハ清國ニ於テハ條約上ノ義務ニ、又露國ニ於テハ從來ノ確言ニ反スルモノナルコトヲ清露兩國政府ニ注意セリ。

而シテ二月十四日日英同盟成立後帝國政府ハ更ニ在清公使ヲシテ清國政府ニ對シ、露國カ結局屈讓スヘキヲ信スルニ足ル理由アルヲ以テ本協定ニ對シテハ確乎タル態度ヲ維持シ滿洲協約ハ慶親王修正通リトシテ更ニ此上變更ナシニ之ヲ締結スヘキ趣旨ヲ催告セシメタリ。

斯クシテ露國政府ハ一月下旬慶親王ヨリ提出セル滿洲協約ノ修正ヲ主義ニ於テハ認メタルモ、本協定ニ付テハ露國提案ノ儘ニテ之ヲ締結センコトヲ直接間接ニ清國政府ニ申入レタル趣ナリシカ、日英同盟ノ締結ニ依ル事態ノ變化ニ鑑ミタルモノノ如ク同政府ハ二月初旬其態度ヲ變更シ、清國ヨリ滿洲協約ノ修正ヲ申入レタル際ニハ本協定ニ對シテハ何等ノ回答ヲ與ヘス遂ニ其儘トナレリ。

第五項 滿洲還附協約ノ締結

明治三十五年一月二十三日露國側ハ主義ニ於テ滿洲協約ノ清國側修正ヲ認メタルモ、露清銀行ト清國政府トノ協定ハ露國原案ノ儘之ヲ締結センコトヲ固執セル趣ナリシヲ以テ、一月二十五日小村外務大臣ハ内田公使ニ對シ、慶親王ニ會見ノ上協約ノ修正ニシテ日本政府ノ勸告ニ依ル修正ト實質上ノ差異ナキヲ確ムルニ於テハ訓令ヲ勸メ若シ相違アラハ從來ヨリ與ヘタル異議ヲ復説シ、協定ニ付テハ延引方ヲ警告シ、尙英米公使ト協働スヘキ旨ヲ訓令シタリ。依テ内田公使ハ一月二十七日外務部ニ於テ慶親王ニ面會シ協約及協定案ノ内示ヲ求メタル處、二月六日清國側ヨリ内示セル最終協約案ニハ是迄ノ案

ト左ノ差異アリタリ。

第二條 「並ニ他ノ舉動」ハ復活シ

ロ項ニ「吉林省内ノ露兵」ヲ加ヘ

ハ項「吉林省」ヲ除キ黑龍江省ノミトス

第三條 「其外ニ清國ハ更ニ兵隊ヲ加ヘ練セス」ノ下ニ「唯露國各軍全ク撤退シタル後ハ清國ニ於テ東三省ニ駐屯スル兵數ノ應ニ加フヘキト減スヘキヲ酌量シ露國ニ知照スヘシ」ヲ加フ

第四條 第一項ノ終ニ「他國ニ請ヒ保護、敷設及維持スルコトヲ庸フルコトナシ竝ニ他國カ露軍退去ノ各地ヲ占領スルヲ准スヘカラス」ヲ附加ス

第四項 「失費ハ」ノ下ニ「未タ大賠償款内ニ編入シアラサルヲ以テ清國政府ハ露國政府ト商議ノ上」ヲ加フ

然ルニ露國政府ハ清國側ノ修正ニ對シ容易ニ回答ヲ與ヘサリシカ、日英同盟締結ノコトヲ聞込ミタルモノカ或ハ英米側ノ異議アリタル爲カ其後態度ヲ改メ、二月八日頃「レツサル」公使ハ慶親王ヲ訪ヒ滿洲還附協約ニ左ノ修正ヲ加ヘテ早急ニ之ヲ締結センコトヲ申出テ、從來頑強ニ固執セル露清銀行トノ協定ニハ何等言及セザリキ。

一、露國軍隊ノ撤退ハ協約第二條規定ノ一年ノ代リニ三年ニ遂行セラルルコトトナスコト
二、第三條ハ慶親王ノ修正ヲ排シ露國原案ヲ復活スルコト
鐵道失費ハ北京會議ニ提出セラレタル大賠償ト關係ナク清國ヨリ支出スルコト

右露國提案ニ對シ慶親王ハ此上何等ノ修正ニ同意シ難シ、但一ケ年ノ撤兵期限ハ二三ケ月延長スルコトナラハ同意スルモ可ナル旨ヲ答ヘタル趣ナリ。

右ニ關シ帝國政府ハ前項ニ述ヘタル如ク本協約ヲ協定ト離シテ調印セシムル方針ニテ二月十四日小村大臣ハ内田公使ニ對シ、露國カ結局屈讓スヘキヲ信スルニ足ルノ理由アルヲ以テ露清銀行協定ニ關シテ從來通り確平タル態度ヲ維持シ、滿洲協約ハ慶親王修正ノ通りニテ更ニ此上ノ變更ナシニ之ヲ締結スヘキ旨ヲ強硬ニ慶親王ニ催告スヘキ旨電訓シタリ。

内田公使ハ二月二十一日露國公使カ慶親王ヲ訪問スル由ヲ聞キ英公使トモ協議ノ上、豫テ受有セル訓令ニ基キ郵書記官ヲシテ同親王ニ對シ露國カ清國ノ提議ヲ斥ケ滿洲撤退ヲ遷延スル場合ニハ帝國政府ハ露國ニ交渉スル所アルヘシトノ決心ヲ繰返サシメ同親王ヲ勸勵シタリ。

其後三月中旬露國ハ第二條ノ各撤兵期ヲ六ケ月トスルコト及其他ニ關スル最終的修正ヲナシ來レル趣ヲ以テ清國側ヨリ我方ノ意見ヲ聚メ來リタルニ依リ右撤兵期限ヲ認メ其他二三ノ點ニ付注意ヲ與ヘタルカ、結局四月一日帝國政府ハ協約ノ速ニ締結セラルルコトヲ欲シ異議ヲ拋棄シ英米側トモ其趣旨ニテ協議ヲ遂ケ、其結果四月八日滿洲ニ關スル清露間ノ協約調印セラレタリ。

第四節 滿洲ニ關スル第三回露清協約問題

第一項 露國ノ七ヶ條要求

明治三十五年四月八日北京ニ於テ調印セラレタル滿洲還附協約第二條ニ依リ露國ハ同年十月八日迄ニ盛京省西南部ニ於ケル、及明治三十六年四月八日迄ニ盛京省殘部及吉林省ニ於ケル露國軍隊ヲ撤退シ其行政權ヲ清國ニ還附スヘキ旨ナリシ處、露國ハ第一期ノ撤兵ハ實行シタルモ第二期撤兵區域ハ滿洲

三四一

ノ過半ヲ占メ、露國カ過去數年來各般ノ經營ヲナシタルト清國及帝國ニトリ利害關係頗ル大ナル地方ナルヲ以テ帝國政府ニ於テハ其撤兵ニ特ニ注意ヲ加ヘ來レリ。然ルニ奉天ニ於テハ露兵ノ大部及警吏ノ引揚、從來露人ノ占據セル將軍衙門其他ノ官廳ノ還附等ハ行ハレタルモ依然トシテ露兵千餘名殘留シ、牛莊其他ノ要地ノ露兵ニ依ル占據ハ依然舊ノ如クニシテ撤兵遲延シタル處、右ハ清國外務部ノ質問ニ對シ露國代理公使「ブランソン」ノ與ヘタル、撤兵ノ遲延ハ必要ノ準備間ニ合ハサルト目下歸國旅行中ノ「レナール」公使ニ露國政府カ必要ノ訓令ヲ與フル等ノ事情ニ依ルモノニシテ露國ハ滿洲協約ノ規定ヲ格守シ撤兵ハ必ス實行スヘシトノ確言ト符號セサル實況ニ在リキ。而モ四月ニ入り鴨綠江畔ヘノ露兵ノ移動、芝罘其他ニ於ケル露國側ノ石炭及食料品買收等ノ報アリテ事態不穩ノ兆アリ、更ニ撤兵間際ニ至リ露國ハ却テ奉天及牛莊ニ増兵ヲ行ヒタルノミナラス牛莊ノ行政還附ヲ拒絕セリトノ報ヲ傳ハレリ。依テ小村外務大臣ハ露國カ第二期ノ撤兵ニ關聯シ何等カ特殊ノ讓與ヲ清國ヨリ強要セントスルヤモ圖ラレスト思考シ在清內田公使ニ訓示スル所アリタリ。

然ル處明治三十六年四月十八日露國代理公使「ブランソン」ハ七ヶ條ノ要求ヲ外務部ニ提出シタルカ、右要求ノ要旨ハ四月二十五日內田公使カ外務部ヨリ內密ニ入手セルモノニ依ルニ左ノ如シ。

- 第一條 遼陽スヘキ疆土ハ孰レノ部分タリトモ就中營口及遼河水域ハ他國ニ賣渡シ又ハ租與スヘカラス、若シ之ヲ爲サハ露國ニ對スル威嚇ト看做シ露國ハ其利益保護ノ爲斷乎タル措置ヲトルヘシ
- 第二條 全蒙古ノ行政組織ノ變更ハ叛亂ヲ起シ露國國境ノ騷亂ヲ生スヘキニ依リ之ヲナスヘカラス
- 第三條 露國ニ豫告セスシテ滿洲ニ於テ市及港ヲ開キ外國領事ノ駐在ヲ許スヘカラス
- 第四條 清國北部ハ露國ノ利益優越ナルヲ以テ各種ノ行政事務ノ爲ニ露國人以外ノ外國人ヲ聘用ス

ヘカラス、例ヘハ蒙古及滿洲ニ於ケル礦務ニハ露國技師ヲ聘用スヘシ

第五條 營口旅順間及盛京省內ノ露國電信線ノ有ル限リ營口北京間ノ清國電柱上ニ架設セル露國電線モ維持スルコト

第六條 還附後營口稅關ノ收入金ハ露清銀行ニ預入ルヘキコト

第七條 占領中露國臣民及外國會社カ滿洲ニ於テ正當ニ獲得シタル權利ハ撤兵後モ依然之ヲ享受スヘキコト、鐵道沿線ノ衛生防疫ノ爲牛莊ニ於テハ占領中施行セル衛生規則ヲ遵守シ、右衛生規則ノ辦理ノ稅務司及醫官ハ露國人ヲ採用シ、又道臺督辦ノ下ニ在營口各國領事及右稅務司、醫官、專門家並ニ東清鐵道督辦ヲ委員トスル衛生局ヲ設ケ、其設立及規則ハ定ムル露國領事ト商議ノ上制定スルコト、其經費支辨方法ハ外務部ニ於テ査定スルコト

右露國ノ要求ニ關シ內報アリタル旨四月十九日內田公使ヨリ報告アリタルヲ以テ、同月二十日小村大臣ハ內田公使ニ對シ「露國ハ滿洲撤兵ニ關シ新規ノ要求ヲ爲シタリトノ報帝國政府ニ達シタルニ依リ帝國政府ハ清國ノ領土保全並ニ其主權ヲ毀損シ又ハ滿洲ニ於ケル列國ノ條約上ノ權利利益ニ害アル讓與ヲ露國ニ許スルノ清國ニトリ極メテ危險ナルコトニ付懸ニ累次與ヘラレタル警告ヲ茲ニ繰返ササルヲ得ス、滿洲問題ニ關シ從來帝國政府ヨリ清國ニ與ヘタル友誼援助ニ鑑ミ清國カ帝國政府ノ確知及同意ヲ俟タスシテ右ノ如キ讓與ヲ許スルコトナカルヘキハ帝國政府ノ確信シテ期待スル所」ナル旨ヲ慶親王ニ警告スル様訓令シタリ。

內田公使ハ右警告ヲ與ヘタルニ、慶親王ハ露國今同ノ要求ハ撤兵問題ト關聯シテ考查スヘキモノニアラサルヲ以テ直ニ之ヲ拒絕スヘキ旨外務部侍郎聯芳ニ訓令セル旨ヲ答ヘ、露國要求ノ公文寫ヲ送付ス

ヘキ旨ヲ述ヘタリ。
右公文入手後五月一日帝國政府ハ各條ニ對スル反對意見ヲ内田公使ニ電報シ之ヲ慶親王ニ傳ヘシメタリ。右意見ノ要旨左ノ如シ。

第一條ノ目的カ清國ノ主權ヲ害スヘキ土地獲得ヲ豫防スルニ在ラハ右ノ範圍ニ於テ差支ナキモ、露國ノ越意ハ居留地ノ設定其他通常事務ノ施設ヲ滿洲ニ限リ之ヲ許サス滿洲ヲ他國ニ閉スニ在ルヲ以テ不可ナリ

第二條ハ清國ノ主權ニ妨アルノミナラス將來該地方ノ行政改良進歩ノ希望ヲ奪フモノニシテ蒙古ト滿洲問題トハ關係ナシ

第三條モ清國ノ主權ヲ害シ同時ニ門戶開放主義ニ反シ他國領事官ノ駐在禁止ハ最惠國主義ニ牴觸ス第四條ハ清國ノ主權ヲ害シ機會均等主義ニ背反シ若シ之ヲ許セハ各國共其所謂勢力範圍ニ於テ同様ノ要求ヲナスコト必然ナリ

第五條ノ露國占領ノ清國電線ハ清國政府ニ返還セラルヘク露國架設ノモノモ又交附セラルルヲ至當トス、殊ニ電信線保護ノ名ノ下ニ駐兵ノ口實ヲ與フル虞アリ、清國電柱ノ使用ハ許スヘカラス第六條ノ海關收入ノ保管ハ清國政府ノ決定ニ一任スヘキモノナリ

第七條ノ露國臣民及外國會社ニ於テ正當ニ取得シタリト謂フ權利ナルモノノ性質ヲ明確ニスルコトヲ要ス

一國カ開港場ニ檢疫制度ヲ組織シ檢疫官ニ其國人ヲ採用スル權利ヲ要求スル能ハス、若シ區別ヲ設クルナラハ貿易額其他利害ノ大小ヲ以テ基礎トスヘキモノナリ

先之帝國政府ハ露國ノ要求ニ付内密ニ英米兩國政府ニ通シ、又清國ニ對スル勸告ニ付テモ通報シ協同措置ニ出テシテ交渉シタルニ、兩國政府トモ之ヲ容認シ爾來三國ハ之ニ關シ事實上協働ノ方針ヲ採リ、英米兩國政府モ各其在清公使ヲシテ清國政府ニ警告ヲ爲シタル結果、清國政府ハ四月二十七日附ヲ以テ露國ニ對シ其要求ヲ拒絕スルト共ニ滿洲協約ノ規定ニ依リ撤兵ヲ要求シタリ。此間米國政府ハ其在露大使ヲシテ露國政府ニ對シ露國ノ要求殊ニ滿洲ニ於テ新ニ開港地ヲ設ケサルコト、外國領事ノ駐在ヲ許ササルコト、北清ニ於テ露國人以外ノ外國人ヲ聘用セサルコトニ關シ質問セシメタルニ、露國外務大臣ハ米國大使ニ對シ、露國ハ清國ニ對シ直接ニ何等右様ノ要求ヲナシタルコトナシト確言シ、撤兵ノ實行ニ多少ノ遲延アリシハ清國側カ協約ノ規定スル義務ヲ履行セシヤヲ確メタルカ爲ナリト説明シ、尙露國ハ滿洲ニ於テ排他的政策ヲ取ラントスルモノニアラスト明言セルカ、在英露國大使モ「ランズダウ」侯ニ對シ同様趣旨ノ言明ヲ爲シタル趣ナリ。

- 四月二十九日慶親王ハ露國代理公使ニ對シ露國要求ノ受諾シ難キコトヲ逐條説明シタルニ、先方ハ討議ヲ避ケ更ニ
 - 一、遼河水域ヲ他國ニ讓渡セサルコト
 - 二、滿洲ニ於テ新ニ市及港ヲ開カス之ニ外國領事ノ駐在ヲ許ササルコト
 - 三、蒙古ノ行政組織ヲ變更セサルコト
 - 四、外國人ヲ聘用セサルコト
- ノ四ヶ條ノ保證ヲ求ムルノ公文ヲ提出シ、之カ承諾アラハ直ニ撤兵ヲ行フヘシト申出テタルモ慶親王ハ之ヲモ拒絕セル趣ナリ。

其後五月二十九日「レッサル」公使歸任シ六月十日慶親王ニ對シ、自分ノ面目ヲ立テラレタシト哀訴的
態度ニテ清國側ノ拒絕セル「プランソン」ノ提議七ヶ條ノ再考ヲ求メタルヲ以テ、慶親王ハ遂ニ牛莊稅
關ノ收入金ヲ露清銀行ニ預入スルコト及牛莊ニ檢疫局設置ノコトハ再考シ得ヘキモ他ノ五ヶ條ハ全然
拒絕ノ外ナシト答ヘ、先方ノ希望ニ依リ七ヶ條ノ要求ニ對スル逐條的拒絕ノ回答ヲ送リタル趣ナリ。
在清内田公使ハ六月十八日外務部ヲ訪問シ奉天及大東溝ノ開放ヲ促シ又撤兵ノ交渉條件ハ悉ク之ヲ拒
絶スヘキヲ勸告シタリ。

七月十四日在本邦露國公使ハ小村外務大臣ヲ來訪シ、北京ニ於ケル露清交渉ハ滿洲ニ於ケル露國ノ利
益擁護ノ爲行ハレツツアルコト及露國政府ハ滿洲ニ於テ外國ノ爲新港(但シ居留地ヲ設ケス)ヲ開ク
用意アル旨ヲ申出テタリ。

第二項 露國ノ新要求

前項ニ述ヘタル露國ノ要求ニ對スル清國政府ノ拒絕ニ關シ在清露國公使「レッサル」ハ本國政府ニ請訓
セルカ、同明治三十六年九月四日同公使ハ外務部左侍郎聯芳ニ對シ、今回漸ク回訓ニ接シタル處露國ハ
舊ニ「プランソン」ヨリ提出シタル要求ヲ撤回シ更ニ七ヶ條ノ新要求ヲ提出スル筈ナリ、今回ノ要求ハ
清國ニ於テ速ニ承諾シ得ヘキ甚タ穩當ノモノナリト告ケ、九月六日ニ至リ外務部ニ左記要領ノ要求ヲ
提出シタリ。

一、清國ハ借地又ハ抵當若クハ如何ナル形式ヲ以テスルモ滿洲ノ何レノ部分タリトモ他ノ國ニ割讓
セストノ保證ヲ與フルコト

二、露國ハ

(一) 滿洲ヲ還附ス

(二) 現在ノ武備管地ノ狀態ヲ解除ス

(三) 滿洲ノ政府ヲ還附ス

(四) 左ノ順序ニ依リ撤兵ヲ完了ス

(イ) 奉天省ニ於テハ直ニ牛莊、鳳凰城、沙開子(安東縣)、遼陽ノ守兵ヲ撤去ス
(ロ) 吉林省ニ於テハ四ヶ月内ニ吉林、伊通、寬城子、米沙子、陶賴昭ノ軍隊ヲ撤去ス
(ハ) 爾餘ノ吉林省即甯古塔及防什河ノ殘存部隊及黑龍江省即齊齊哈爾及海拉爾ノ部隊ハ一ヶ年以
内ニ撤去ス

三、東清鐵道ハ本年七月營業開始ノ運ニ至ルヲ以テ其營業及運輸ノ利便ヲ圖ル爲

(一) 松花江航行及電信保護ノ爲露國ハ沿岸ニ埠頭ヲ設ケ、又其物件及倉庫ノ安全ノ爲護衛兵ヲ置ク
(二) 現在ノ鐵道線路ト「ブラゴヴェシチンスク」間ノ交通安全ノ爲露國ハ齊々哈爾、墨爾根、「ブラゴ
ヴェシチンスク」間ノ大路ニ一時的ノ驛站ヲ設ク

四、東清鐵道營業開始後其輸送貨物ニ付左ノ二項ヲ定ムルヲ要ス

(一) 清國ハ此輸送貨物ニ特種稅ヲ課セサルコト
(二) 滿洲間ノ一驛ヨリ他驛ニ輸送スル貨物ニ對シテ水陸運貨物ニ對スル稅ヨリ高率ノ稅ヲ課セサル
コト

五、露兵撤退後露清銀行各支店保護ノ爲其請求アル時ハ清國將軍ノ兵ヲ置クコト但シ其費用ハ銀行ニ
於テ負擔ス

六、近ク牛莊ヨリ撤兵スルニ付防疫ノ方法ヲ商定スルコト

七、右防疫方法ノ外鐵道沿線及露領接壤地防疫ノ爲道臺處辨ノ防疫露國醫師一名ヲ置クコト

右要求ニ關シ九月八日慶親王ハ内田公使ニ對シ、今回ノ露國要求ハ平穩ノ方ナルヲ以テ其中忍容シ得ヘキ個條ハ承諾シ以テ差迫レル十月八日ノ第三期撤兵ヲ實行セシメタルノ意向ヲ告ケタルヲ以テ、内田公使ハ其受有セル訓令ニ基キ日露間ニ於ケル直接交渉ノ成行ヲ待タス此際取急キタル處置ヲナサナル様勸告シ、其後右要求ノ個條ヲ査閲シタル上更ニ右要求カ清國ノ主權ヲ制限シ且ツ各國ノ利權ヲ阻礙スルモノナルニ付甘諾スヘカラサルモノナルコトヲ警告シタリ。

然ルニ清廷及其政府ハ十月八日ノ第三期撤兵期迄ニ滿洲ノ還附ヲ受ケンモノト取急キ、九月九日ヨリ二十五日迄ノ間ニ露國側ニ對シ各項ニ付別々ニ回答セル趣ナルカ其要旨左ノ如シ。

一、第一項ニ關シテハ滿洲ノ地ハ清國ニトリ緊要ノ地ニシテ永遠ニ之ヲ管理スヘク他國ニ讓與スルノ理ナク、何レノ國ニ對シテモ租貸シ又ハ抵當トスルコトハ清國ノ主權ヲ侵害スルモノナルヲ以テ斷シテ讓許シ難シ、將來通商港ヲ開キ各國民居住貿易且ツ各國教會ヲ建ツルコトハ章程ニ遵ヒ處辨スヘシ

二、第五項露清銀行ハ清露合辦ナルヲ以テ其支店護衛ハ清國軍隊ヲ以テシ其費用モ清國ヨリ支辨スヘシ

三、第六項檢疫所ハ天津、上海等ノ檢疫規則ニ準據シ山海道ニ於テ經營シ、其檢疫施行ノ爲ニ露國醫師一名ヲ増聘スヘシ

第七項防疫ニ付テハ鐵道カ清國々境外ニ出ツルノ後露國ニ於テ自ラ檢疫ヲ行ハハ充分ニシテ、滿

洲鐵道沿線ノ防疫ニ付テハ別ニ議定スルノ要ナシ

四、第三項(一)ノ松花口航行ノ件ハ光緒七年清露改訂條約第十八款ニ於テ再ヒ商定スルコトヲ明ニシ其後光緒二十七年總理衙門ト「プランソン」代理公使トノ間ニ於テ清露輪船行馳章程ヲ商訂シタルカ當時決定ニ至ラス右ハ引續キ協定處辨スヘク、右ニ依リ調査ノ上必要ノ埠頭ヲ設ケ清國兵ヲシテ之ヲ保護セシムヘク、電線モ亦清國ニ於テ架設保護スヘシ

(二)ニ付テハ齊々哈爾、海蘭泡(黑河)間陸路ニハ舊站十ヶ所所有リ將來清國ハ之ヲ整理シ兵隊ヲ派遣シテ保護スヘシ

右ノ如ク清國ハ牛莊檢疫醫一名増聘ヲ除ク露國ノ要求ハ悉ク之ヲ承諾セシメシテ只管露國ニ撤兵ヲ迫ラントシ、我方ハ清國ニ對シ從來ノ態度ヲ堅持セシコトヲ勸告シ居リタル處、其後十一月一日ニ至リ「アレクセエフ」ハ盛京將軍増祺ニ對シ滿洲問題ニ關シ協議ノ爲會見ヲ申込みタルモ北京政府ハ之ヲ拒絕セシメタルヲ以テ、露國側ハ其軍隊ヲ以テ奉天ヲ再占シ將軍ヲ監禁シ北京トノ電信ヲ遮斷シ且ツ硬骨ナル東邊道々臺袁大化ノ免職、奉天省内ノ團練解散等ヲ要求シテ之ヲ實行セシメ、尙南滿ニ派兵シ軍艦ヲ増遣シ陸路海兵ヲ輸送シ、又其公使ハ清國政府ニ森林利權ノ特許ヲ要求スル等ノ舉ニ出テタリ。

而シテ清國々内ニハ日露ノ交渉ヲ以テ滿韓交換ノ交渉ナリ、斯ル交渉ヲ徒ニ待チテ露兵撤退問題ヲ忽緒ニ附スルモノナリ等政府攻撃熾烈トナリタルヲ以テ、北京政府ハ其對策ニ腐心シ、伍廷芳ノ如キハ特別全權委員會ヲ組織シ之ヲシテ列國ト協議セシメントノ案ヲ立テ政府ニ獻策セントシ十一月中旬内田公使ノ意見ヲ求ムル所アリタリ。右案ニ關スル内田公使ノ請訓ニ接シ十一月二十四日帝國政府ハ同公使ニ對シ、右全權委員ノ選任ハ露國ヲシテ更ニ新要求ヲ作出セシムル誘因トナルヘキヲ以テ不得策

ナルノミナラス右委員ハ結局ニ於テ露國ニ讓歩スルニ至ルヘキニ付危險ナリト認メラルルニ依リ伍廷芳ニ對シ、清國カ時局ニ對シ傍觀シ得サルカ故ニ愈々行動ヲトラントスル意ナラハ第一一九〇二年ノ滿洲協約ノ條項ニ依リ撤兵ヲ露國ニ催告シ、若シ露國カ之ヲ拒絶シ又ハ撤退ヲナササルニ於テハ問題ヲ海牙仲裁裁判所ニ提起センコトヲ露國ニ提議スヘク、尙之ヲモ排斥スルニ於テハ之ヲ列國ニ訴ヘ其援助ヲ請フヘシ、然レトモ之カ實行ニ當リテハ慎重處理ヲ要スヘク本使ハ日本政府カ清國ヨリ懇望アラハ之ニ必要ナル各種ノ措置振ニ付清國ニ援助ヲ與フヘシト信ストノ趣旨ヲ一己ノ意見トシテ内密ニ語ルヘキ旨訓令シタリ。而シテ内田公使ハ伍廷芳ニ右訓令ノ次第ヲ傳ヘ伍ノ時局問題討議ノ爲ノ列國會議開催案ニモ反對シタリ。

他方露國側ニ於テハ露清銀行支配人「ボズドネフ」ハ清國譯官ヲシテ清國カ露國要求ノ二、三項ヲ承諾セハ露國ハ撤兵スルナラント云ハシメ、又十一月二十九日在清佛國公使ハ外務部ニ對シ右ト同様ノコトヲ述ヘ、清國ニシテ要求ヲ毫モ容認セサルニ於テハ露國ハ非常ニ憤怒シ撤兵ヲ行フコトナカルヘキニ付清國ハ他ノ外國ニ相談スルノ要ナク直接露國ト協定ヲ遂クヘキ旨勸告シタルカ、外務部ハ撤兵ノ實行セラレサル間ハ何等ノ商議ヲナス能ハサル旨答ヘタル趣ナリ。斯ク清廷ハ當初ヨリ露國要求ノ一部ヲ承諾シテ時局ヲ結了セントノ意向ヲ有シタルモ、慶親王、那桐及外務部ハ帝國政府ノ助言ニ信頼シテ從來ノ態度ヲ固持シ露國ノ要求ニ應セザリシ間ニ日露開戦トナレリ。

第九章 滿韓ニ關スル日露間交渉

韓國問題ハ明治三十一年四月西外務大臣ト露國公使「ローゼン」男トノ間ニ日露議定書締結ニ依リ一時落着セル處、北清事變後明治三十四年一月在京露國公使「イゾヴォルスキイ」ハ帝國政府ニ對シ、列國共同保證ノ下ニ韓國ヲ中立國トスル案ニ關シ同案實行ノ條件ヲ内密且ツ友誼的ニ協議シ度旨ヲ申出テタリ。

之ニ對シ帝國政府ハ韓國問題ハ滿洲問題ヲ之ニ牽連セシメサレハ満足ニ解決シ難キニ付滿洲ノ撤兵履行セラレ中立保障ヲ滿洲ニモ及ホスカ又ハ勢力範圍ヲ確定スル意アルニアラサレハ右議定書ノ約束ヲ以テ満足スルノ外ナシトノ趣旨ヲ以テ之ヲ拒絶シタリ。

然ルニ我方トシテハ韓國ニ於テ全然自由ノ行動ヲ執リ得ル様韓國問題ヲ解決セントスル意圖ニハ依然變化ナク、伊藤侯ノ如キハ之カ爲ニハ滿洲ニ於テ露國ニ幾分ノ自由行動ヲ認メテ露國ト協和スルヲ得策トシ、明治三十四年十一月歐米漫遊ノ途次露都ヲ訪問シ、「ラムズドルフ」伯及「ツイテ」ト私的會談ヲ行ヒ協商ノ基礎タルヘキ双方私案ヲ提出シ、侯ハ政府ニ對シ日英同盟成立前露國トノ交渉ニ入ルヘキヲ勸説シタリ。帝國政府ニ於テハ右伊藤侯ノ勸告ヲ容レス日英同盟ノ交渉ヲ進行セシムルヲ適當ト認メ翌明治三十五年一月三十日日英同盟ヲ締結シタルモ、韓國問題ヲ我方ノ満足ニ解決セシムルヲ適當ト認メ協商スルノ方針ハ棄テタルニアラス、同年春露都ニ赴任セル栗野公使ニ對シ本問題ヲ熱心ニ攻究シ將來ノ正式談判ノ基礎ヲ得ヘキ協調ヲ遂クル様訓令スル所アリタリ。他方露國ニ於テモ外務大臣「ラムズドルフ」伯、大藏大臣「ウツイテ」等ハ伊藤侯訪露當時ト同様ニ我方トノ協調ヲ欲シ双方ノ意見